

公開シンポジウム記録集

「東京女子大学旧体育館の解体を再考する」



日時：2009年3月14日（土）13時30分～17時

会場：東京女子大学13号館（旧体育館）

シンポジウム風景

2009年3月14日 東京女子大学旧体育館にて



石井信夫



森 一郎



鳥越成代



パネリストの方々



会場風景



永井路子



田代桃子・斎藤治子



斎藤康代



鈴木博之



松嶋哲英



土合文夫

東京女子大旧体育館の
保存考えるシンポ開催

14日・永井路子さんから参加

1924年に建てられた東京女子大旧体育館（東京都杉並区善福寺）の解体計画をめぐり、保存を求める同大の教職員有志が14日午後1時半から、旧体育館で公開シンポジウムを開く。

同大の旧体育館や講義棟などは、日本におけるモダニズム建築の先駆者となったチェコ出身の建築家、アントニン・レーモンドが設計。旧体育館は、開放感あふれる



2Fから眺めたフロアー風景

広い窓、地面より低い床面、体育館らしからぬたたずまいで、専門家から歴史的価値が高いと評されてきた。キャンパス整備事業に伴う解体の計画があり、早ければ5月ごろにも解体が始まるという。シンポには、卒業生の作家永井路子さんをはじめ、保存の重要性を訴える卒業生、教職員らが参加。また、鈴木博之・東大教授ら建築の専門家が建物の歴史的・文化的意味について発言する。無料、申し込み不要。問い合わせは同大哲学研究室（☎03・53382・6324）へ。

毎日新聞 2009年3月12日掲載



2F EXILEのプロモーションビデオ撮影に使用された暖炉のある部屋



階段踊場



2F テラスと花鉢

目 次

開会	石井信夫	1
1. 開催趣旨説明	森 一郎	2
2. 旧体育館解体再考を願い続けて一昨日までの経過報告	鳥越成代	3
3. キャンパス整備計画について		6
4. 卒業生・元教員から一言		
4 - 1	斎藤康代	7
4 - 2	田代桃子・斎藤治子	10
5. 特別ゲスト卒業生	永井路子	13
6. 建築保存論からみた旧体育館	鈴木博之	19
7. 耐震・改修問題と災害時の安全性	松嶋哲英	22
8. 旧体育館保存後の活用法についての一提案	土合文夫	29
9. 全体討議		32
10. 総括と展望	森 一郎	41
11. なぜ旧体育館を解体しなければならないか	石井信夫	43
12. アピール文		45
13. 学内メールでの意見交換より一教員による旧体育館活用方法の提案		46
14. 当日のご意見・ご質問		55
15. レジюме集他送付用理事宛公開書簡（2009.3.19）		67
16. 3.14 シンポジウム記録集刊行によせて	森 一郎	71



2F 視聴覚室から眺めたフロア風景

公開シンポジウム「東京女子大学旧体育館の解体を再考する」

日時：2009年3月14日13時30分～17時

会場：東京女子大学13号館（旧体育館）

主催：旧体育館シンポジウム実行委員会

◆ 開会 石井信夫（本学教授／数理学科）

石井 本日は休日で悪天候にもかかわらず、教職員手作りのシンポジウムにご参加くださったパネラーの方々に感謝申し上げます。それからお集まりいただいた皆様方にも感謝申し上げます。本日は8人のパネラーからお話を発表いただいて進めたいと思いますが、パネラーの方をお名前だけご紹介しておきます。まず学外から来ていただいた方、プログラムの順番でご紹介します。本学卒業生で名誉教授の斎藤康代先生、本学卒業生の田代桃子さん、同じく卒業生で作家でいらっしゃる永井路子さん、東京大学大学院教授の鈴木博之先生、松島建築研究所所長の松嶋哲瑛先生、学内からは森一郎先生、鳥越成代先生、土合文夫先生です。よろしくお願ひします。

私は数理学科ですが、なぜ私が旧体育館の保存に関心を持つようになったか、ということをお話しておきたいと思ひます。私は本学に来て5年になります。数理学科なのですが、数学専門ではなくて、自然科学が専門です。自然科学というのは、自分が今考へている世界の理解の仕方のどこが間違っているか、ということをお常に積極的に探して前に進んでいくという学問分野です。ですから「これはおかしいなあ」と思ふと、そこにひっかかってこだわる、という性格があるわけです。そして自然科学の中でも生物学が専門です。生物学は自然科学の中でも特に歴史というものを重要視する分野です。進化学などはそうですが、私たち一人一人も40億年の生命の歴史を背負ってここにいるのです。そういうわけで、古いものが好きで大事に思ふということがあります。

そして生物学の中でも、野生動物の保全が専門です。絶滅の恐れがある動物の保護ですとか、そういうことに関わっています。一度失われたものは二度と取り戻すことができない、ということをお日々痛感しています。旧体育館についても、ひょっとしたら私たちはこれを失くしてしまうかもしれない、という思ひがあります。こんなことが、私が旧体育館の問題について関心を持って、とうとう今日は司会までしていることのお背景です。

前置きが長くなりましたが、今日のシンポジウムを始めたと思ひます。今日の集まりは最初に言いましたように、教職員手作りの自由な集まりで、堅苦しい儀礼的な会議ではありませんから、自由に、それから東京女子大らしく品良く、穏やかに、だれど考へることはしっかり考へていく、という集まりにしたいと思ひています。少し役不足ではありますが、ご協力をよろしくお願ひいたします。

それではさっそくプログラムに入りたいと思ひます。まず本学の哲学科教授の森一郎先生から、

今回のシンポジウムの開催趣旨について、説明をお願いいたします。

1. 開催趣旨説明

森一郎 (シンポジウム実行委員長／本学教授／哲学科)

森 5分間スピーチですので、立ったままお話しさせていただきます。今回、レジュメ集を作りました。皆さん、お持ちかと思えます。私もそのために文章を考えて載せたのですが、昨日になって考え直しまして、もう一つ別のバージョンを作りました。そちらを読み上げる形にします。

3月も半ばとなり春は来ているのに、まだ寒い日が続きます。本日はお足元の悪い中、ご参集くださり、ありがとうございます。実行委員会を代表して、シンポジウムの開催趣旨説明をさせていただきます。

東京女子大学では現在、キャンパス整備事業に伴って、新体育館だけではなく旧体育館まで解体して「オープンスペース」にする計画が進められています。大学とともに85年の歴史を歩んできたこの「旧体」は、名手レーモンドの設計によるエレガントなたたずまいと、創意あふれる造りから、本学の誇る「体育兼社交館」として、数多くの学生や教職員に愛され続けています。このようなかけがえのない歴史的建造物を壊して本当によいのか、保存し積極的に活用する方途はないものか、立ち止まって考える機会をもつべきだ、と私たち教職員は思い至り、公開シンポジウムを開催することにしました。

このシンポジウムの最大の特色は、旧体問題に関心を寄せる教職員の内発的な試みとして、自由な言論の場を設け、議論を交わそうとする点にあります。聞くところでは、このような試みは、日本の大学では恐らく初めてのことです。意外な話ですね。大学に籍を置く人間として、これが名誉なことなのか、あるいは不名誉なことなのか、よく分かりません。少なくとも私たちは今回、学外の専門家の方々から具体的な説明を聞き、事柄を吟味し直すことに努めたいと思います。東京女子大学に所属する人間として、大学の将来を見据えたキャンパス整備という難しい問題を、人びとが一堂に会し冷静に意見交換し合う機会に恵まれたことを、誇りに思います。開催にあたり、理事会、大学評議会をはじめとする本学関係者各位に、深い感謝と畏敬の念を表す所以です。

昨今の、大学をめぐる閉塞状況と無力感の蔓延を打破するには、学問の原点に立ち返り、言葉への責任と信頼を持して理性的対話に臨むことが、何よりも重要です。私たちは高等教育に携わる者としての責任において、伝統ある学園にふさわしい志操高き集いとすべく、このシンポジウムを企画し、準備を進めてきました。この趣旨に賛同いただければ幸いです。

以下、三つほど、参加者の皆さんに留意事項を申し上げます。

1. レジュメ集に載せた文章で、私は本日のシンポジウムを「踊り・ダンス」に喩えました。歌や踊りは「遊び」の一種です。見事さを競う遊びに大真面目で打ち興ずる余裕の精神は、プラトンの昔から、リベラルアーツの極意でもあります。遊びには、決まり・ルールというものがあり、また限り・リミットがあります。本日のゲームも長いようで、たった3時間しかありません。パネリストの方々には限られた時間内で短いながらも内容の濃い話をしてくださるよう、お願いしてあります。つきましては、後半の全体討議でも一今回、それを中心にしたいと思いますが一なるべく多

くの参加者の意見を頂戴できるよう、一人一人のご発言はできるだけ短く、簡潔にお願いします。これが第1点です。

2. 本日の会は、旧体育館解体絶対反対を唱える会ではありません。最初に結論ありきという、いわゆる「政治集会」ではないのです。言いかえれば、党派的つまり敵味方色分け的、というありがちな意味で「政治的」ではない、ということです。古代ギリシャ人にとって、人間とは「ポリスの生き物」であり、別名「ロゴスを持つ生き物」でした。ロゴスつまり理（ことわり）を尽くして論じ合うことを好み、生き甲斐とするのが、根源的意味での「自由市民」なのです。リベラルアーツの起源もここに 있습니다。ご参集の皆さんが、そのような真の意味での「ポリスの」人間であることを、期待してやみません。

3. シンポジウムの最後に、アピール採択が予定されています。本日の議論に参加した人全員の総意となりうるような、それどころか、健全な理解力を持つすべての人に賛同してもらえるような、ごくまっとうな文案を提示したいと思います。どうか、これから始まる討議をじっくり聞き、時には自ら発言してください。そう、皆さんの公正な判断力がここで試されているのです。

哲学者ヘーゲルにあやかって、こうスタートの合図で始めましょう——「ここが旧体だ、ここで跳べ」。なぞなぞのようなスタートの言葉で申し訳ありませんが、私としては深い意味を込めて、この言葉を使ったつもりです。

以上、簡単ではありますが、皆さんの温かい友愛と連帯を期待しつつ、旧体シンポ開催趣旨説明に代えさせていただきます。

石井 森先生、ありがとうございます。それではプログラムの2番目、本学の健康・運動科学研究室の鳥越先生から、今までの旧体問題に関する経緯を報告していただきます。鳥越先生、よろしくお願いたします。

2. 旧体育館解体再考を願い続けて——本日までの経過報告

鳥越成代（教職員有志代表／本学教授／文理学部健康・運動科学研究室）

鳥越 鳥越でございます。よろしくお願いたします。本日は大変天候の悪い中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。私は今までの経過につきまして、お話しいたします。

本学は今年度90周年を迎えております。記念事業としてキャンパスの再開発計画が立てられまして、その一環として新しい建物——旧体の隣りに建てられている、ご覧になったかと思いますが——高層の研究棟、それからその横に体育館棟がほぼできあがっております。1カ月後ですが、4月15日の竣工式が終わりますと、現在ここに 있습니다 体育館、それから隣りの新体育館はただちに解体されることになっております。

旧体を使い続けて

—昨年、東寮が解体された後、この旧体育館は、西校舎——正門を入られて左側にあります西校

舎、現在7号館と呼びます——や、後ろにあります外国人教師館などとともに、キャンパス内に最初から残る貴重な建造物です。全人的な教育を目指す大学の理念を象徴してきた建物だと思っています。この建物は健康・運動科学の授業、あるいは学生の運動部のクラブ活動の場としてだけではなく、設計者レーモンドの優れた空間感覚と斬新な設計思想を今に伝える貴重な文化財でありまして、登録文化財となっております他の七つのレーモンド建築に劣らず、大学の90年の歴史と誇りにかけて後の代に伝えるべきかけがえのない財産だと思います。

私は健康・運動科学研究室に所属しております、体育の教員としてこの体育館を40年以上使い続けています。最も長くこの体育館を使い続けている者として、申し上げたいことがございます。この後ろ隣りにあります新体育館が建築されたのは、ちょうど35年前、1974年でした。それ以来、両方の体育館を使ってまいりました。両方使ってみて初めてわかったことなのですが、驚きましたのは、この旧体育館の使い心地のよさでした。今、非常勤の先生方も両体育館を使っていますが、誰もが口をそろえて「この旧体育館は使い心地がよい」「落ち着きを感じる」と言ってくれます。建物というものは機能性も大切ですが、そこに集う者に安らぎを与えるということは、すばらしいことだと思っています。間違いなくこの旧体育館のすべての部屋に——後でご覧いただきたいのですが、小部屋もたくさんございます——新しい建物にはなかなか求められない安らぎがあります。大変寒い時とか暑い時、あるいはジメジメしている時には運動するのが辛く思えたりするのですが、そんな時には私はいつも旧体育館で授業をしたいと思っています。厳しい条件も軽くなる気がします。なぜなのか、考えていませんでしたが、これがこの建物の持つ力なのだと思います。

旧体育館は85歳になりますから、もちろん耐震性の補強とか、補修が必要になります。今まで一度も大規模に改修したことのない床とか、屋根の補修ができれば、今後も長く誇れる建物として生き続けられるのだと思っています。

この旧体育館には学内の他の七つのレーモンド建築とはちょっと違う特徴があります。本学が創立された当初は新宿の角筈に校地があったのですが、現在のキャンパスに移転した年——大正13年です——にこの旧体育館はできあがっていました。その時、最初に入った学生から現在まで、すべての学生が授業で使い続けている現役の体育館ということです。実は今日も、ここを使う予定だった競技ダンス部の学生にお願いして、譲ってもらいました。旧体育館は現在でも、土日を含めましてほぼ一年中使われております。これほど使われている建物は他にはありません。

本日までの経過報告

話は変わりますが、3年前2006年3月に全教職員を中心に、90周年のキャンパス整備計画概要について、三菱地所設計から説明がありました。私はその時の計画図面から、新・旧体育館がなくなるということを初めて知りました。

理事長の説明によりますと、基本計画の作成にあたりましては、2005年から実態調査および分析、アンケート調査等を行い、学内意見の聴取と問題点の集約・調整を経て、2006年5月18日に理事会が決定しており、手続きに問題はないとおっしゃっています。しかしそのアンケート調査用紙が各研究室にきましたのが、2005年5月31日で、そこには新・旧体育館の解体についての記述はありま

せんでした。もちろん牟礼校地——東京女子大学には二つのキャンパスがあったのです——が売却されると知ったのは、その後の2005年7月でしたから、その売却益によって建物が建てられる可能性があることは、一部の教職員を除いて知らなかった時期です。

それで、本日お配りしましたが、2006年8月25日の学報に「キャンパス整備計画について」という原田理事長の記事が載っています。私どもに知らされた情報というのは、2005年11月の教授会での説明、2006年3月——先ほど申し上げました——の三菱地所設計による説明会、それからアンケートの経過報告、そして学報、これだけでした。体育館の住人であります私ども健康・運動科学研究室以外の人たちが、旧体育館に関心を寄せるということは難しいことだと思います。

2008年6月に教職員の全学的な動きとしまして、理事長と学長および理事会宛てに、「旧体育館解体再考に関する要望書」というものを、教員・特別職員21名が呼びかけ人になりまして、大変短い期間だったのですが、48名の賛同者を得まして、その署名(計69名)とともに提出いたしました。このことは一つには、2008年4月に行われました学生による、東京女子大学学会学生研究奨励費受賞研究「東京女子大学の旧体育館を中心とする校舎の研究」——これもお手許の資料の中にあります——の発表が契機になっております。教職員のみならず、大勢の学生、卒業生が旧体育館保存のための署名活動に参加していらっしゃることも伺っておりますが、学校からはその報告はまったくありません。

旧体育館解体は理事長も学長も、すべては東京女子大学の将来を考えての選択とおっしゃいます。理事会では、旧体育館解体の再考をお願いしている者たちは、一部の者とみなされていると聞いてもおります。本学の英語名はTokyo Woman's Christian Universityと言います。Woman'sとわざわざ単数形を使っておりますのは、一人一人を大切にするという精神がそこに表れているのだと伺っております。その一人一人を大切に、一人一人の意見を大切にという精神は一体どこへ行ってしまったのかと、今は悲しい思いにさせられております。

理事長、学長だけではなく、私たち教員もまた、東京女子大学の将来を真剣に考えています。東京女子大学の宝物の一つであるこの旧体育館を、納得できる説明もなしに「理事会が機関決定をすでにした」ということで諦めてしまうことは、あまりに残念なことです。今後も「なぜ旧体育館を解体してオープンスペースにするのか」「本学の将来、発展を考える上で解体することが本当にいいのか」を問い続け、すぐに解体してしまうのではなく、計画をいったん凍結してくださるように求め、話し合いを続けていきたいと思っております。どうぞご理解ご支援のほど、よろしく願いいたします。

今回のシンポジウムに至る経過

2005年5月：「キャンパス整備計画委員会アンケート」についての検討(理事会報告)
2005年5月：各研究室にアンケート配布
2005年6月：アンケート回収
2005年9月：法政大学への牟礼キャンパス譲渡手続き完了
2005年11月：教授会(牟礼キャンパス売却、善福寺キャンパスのマスタープランの説明)
2006年1月：第1回キャンパス整備計画委員会

2006年3月：三菱地所設計による教職員への説明会（大教室でのパワーポイントによる概要説明） 現在の新、旧体育館がなくなることをはじめて知る。

2006年5月：理事会にて基本計画の決定

（2005年12月～2008年：健康・運動科学研究室は、旧体育館解体および体育館建築計画について、理事長、理事会、学長、事務局長等に対し、再三にわたり要望書提出、申し入れを行い、話し合いをもった）

2007年11月：旧体育館解体を確認（第9回キャンパス整備計画委員会）

2008年2月：学生による東京女子大学学会奨励研究「東京女子大学の旧体育館を中心とする校舎の研究」発表

2008年3月：オープンスペース案の検討（第10回キャンパス整備計画委員会）

2008年4月：新入生オリエンテーションにて学会研究奨励賞受賞研究「東京女子大学の旧体育館を中心とする校舎の研究」発表

2008年6月：理事長、学長、および理事会宛に「旧体育館解体再考に関する要望書」を教員・別職員21名の呼び掛け人と賛同者48名の署名とともに提出

2008年7月：理事長と賛同者有志との会合。参加者40名

2008年9月：理事長回答「意見は聞いたが変更する根拠にはなりえない」
理事会側の説明による解体の理由：災害時の避難スペース・「憩いの場」の確保、老朽化、耐震性への不安、補修・改修のための資金不足、火災時における消防車の走路確保

2008年10月：解体の具体的な理由についての説明会開催要望書を提出

学長から、理事長が理事会で「この件については変更なし」と言われたと報告

2009年2月：学生による学会奨励研究「東京女子大学の建物の研究」発表

教職員有志が主催する公開シンポジウムの開催宣言

教授会選出評議員と理事長の会合：説明会を要請するも却下

石井 鳥越先生、ありがとうございました。

3. キャンパス整備計画について

石井 最初に言い忘れましたが、シンポジウムのプログラムに「3. キャンパス整備計画について〔交渉中〕」と書いてあります。現在のキャンパス整備計画を進めている立場の人たちから「なぜ旧体の解体が必要なのか」などについて、お話していただきかったのですが、今日はご参加いただけないということなので、この項目はなくなります。

次にプログラムの4番目「卒業生・元教員から一言」ということで、まず本学の卒業生で、名誉教授であります、英文学がご専門の斎藤康代先生から、お話をいただきたいと思います。先生よろしくお願いたします。

4. 卒業生・元教員から一言

4—1 斎藤康代（1958年文学部英米文学科卒／本学名誉教授）

はじめに

先ほど司会者の方が「どうぞ、お座りになって」とおっしゃったので、私一人、座っております。失礼致しました。今与えられている時間は5分ということですので今度は立ったままさせていただきますが長くなりましたらお許してください。

現在、東京女子大学の卒業生は約 55,000人ということです。大学に関わられた教職員とか、関係者を含めると相当な数になります。その中で私は何の代表というわけではなく本当に小さな存在の一人に過ぎません。新渡戸先生のお言葉を借りますと「^{いとちひさきもの}最小者」（『創立十五年回想録』141頁）でしかありません。でもその「^{いとちひさきもの}最小者」も神様の前には平等である、という精神に支えられ励まされ、勇気を絞ってここに立つております。

私のささやかな身近な経験から、3つのことをお話ししたいと思います。

シンポジウムは本学の精神の継承の証

先ず一つ目はこのようなシンポジウムが開催されましたことを心から喜び、感謝しているということです。どんなにか皆さまご苦勞なされたことでしょうか。大学側の態度が納得できないという方々が、諦めずに忍耐強く、このシンポジウムを実現されたことに、私は本学の精神が継承されていることを思って感謝しております。

私は1954年から4年間、学生でした。その間学んだことの中で一番大切だと思っているのは「自分でよく考える」ということです。私の考え方の核となっているのは、地位とか権力のある人の言葉だから正しいとか、善いとか、いうのではなくて、名もない人の誰の言葉の中にも真実を見出せることが大切だということです。その力を養うためには、直面する問題に真摯に取り組み、人の意見もよく聴き、自らよく考えるということ。そして自分の意見を発言していくことが大切だということです。私が学んだこの精神が、今も生きていることを嬉しく思っています。

体育兼社交館としての役割

二つ目は、私は1970年から35年間、牟礼と善福寺の二つのキャンパスで教育職員として生活することを許されたにもかかわらず、本学について非常に表面的なことしか知らなかったということ。特にこの善福寺キャンパスの建物について、あまりに無知であったことを恥じているということです。

今はなくなってしまいました東寮のあの堂々とした、しかし非常に優雅なたたずまいに魅了されて、その文化的価値が高いということを知りましたのは、私が退職してから、東寮解体決定後の見学会においてでした。その後、私はたびたび東寮を訪れるようになりました。単なる建物ではなく

て、何か命のある存在として迫ってくるように思いました。解体再考の嘆願は叶えられず、感謝の礼拝も捧げられないまま、あの美しい窓も瓦も粉々にされて無残に葬られました。せめて美しい塔だけは残して欲しかったと今でも思います。残念で堪りません。その東寮のことについて原田鎮郎先生という建築家が『新建築』という雑誌に書いておられます（2008年4月号、新建築社、142頁）。そのコピーが配られていると思いますので、興味のある方はご覧いただきたいと思います。

また私は、東寮のそばに立っていた大きな杉の木と、塔の中にあった井戸が葬られる時に、清水建設がある儀式をするのを、フェンスの外から悲痛な思いで見守りました。その後、本学の歴史に学ぼうと思ひまして、『創立十五年回想録』（東京女子大学、1933年）という本の読書会を始めました。その中で改めて、レーモンドによる初期の建物は本学の創設者の理想や建学の精神を体現している、ということを考えさせられたのです。

この体育館が「体育兼社交館」（『前掲書』393頁）と呼ばれて、体育と社交、身体の鍛練ばかりではなく、人と人との関係を重視した思想の一つの形としての建物である、ということを知りました。今はそのことが広く知られるようになりました。A. K. Reischauerの原文と訳は、資料の中にありますので、後でぜひご覧いただきたいと思います。これはまだこの体育館が完成されていない時（体育館完成は9月、落成式は4月）西校舎で行われた落成式および安井学長の就任式において「校印および鍵の交付の辞」として述べられた言葉です。その中から関係箇所を以下に引用します。下線部をご覧ください。

On behalf of the Board of Trustees it gives me, therefore, profound satisfaction to hand to you, President Yasui, the keys of this Institution.

This key opens the doors to the Athletic-Social Building and in handing it to you I do so with the belief that you realize fully the importance of physical training and the cultivation of social graces in our modern education. （『前掲書』389頁）

この体育館は the Athletic-Social Building であり、physical training の重要性と同時に、the cultivation of social graces を掲げています。日本語の訳ではこのcultivationが「教養」（『前掲書』393頁）と訳されていますが、私はsocial gracesをcultivate することつまり社交上の美德あるいは品格のある社会性を涵養するという意味に読みたいと思います。

この就任式において安井先生は教育方針として四つのことを話されました。人格教育、体育重視、リベラルカレッジ、そして最後に、学究的生活と同時に大切なのは社交的生活だ、と述べています。団体的生活とも言っています。人間の成長のために人と出会って交わることの大切さを強調しています。日本の女子教育の最高機関を目指し、欧米のCollege を念頭においていた草創期の指導者達が、世界の舞台でも正しい人間関係を構築できる女性のあり方として求めた姿だと思います。

出会いには場所と機会が必要です。人との交流や共生を体験する場所として、現代でもこの体育館は最適な建物ではないでしょうか。この歴史的な文化遺産を保存して活かす道を探って頂きたいと心から願っています。

いつ、だれが？——伐られた梅檀の木

最後に三つ目として、1本の梅檀の木のお話をしたいと思います。昭和3年に英語専攻部3年生が中心になって創立した杜の会というのがありました。昭和4年と5年に種と実から育てたと考えられる梅檀の木が、キリスト教センター——レーモンド建築の安井記念館です——の前庭に3本ありました。工事のために2本伐られて、1本だけが工事現場の囲いの外側に残されたのです。大学側の「できるだけ木を伐らないように」という方針を受けての配慮だったと思います。この残された木は春から初夏に可憐な花をつけ、実も楽しめるものでした。ところが夏休み明けに、多分その囲いを広げたのだと思いますが、最後の1本も伐られてしまいました。管財課に尋ねましたら、その報告はなかったようでした。実に無念でした。

知らないところで、このようなことが起こらないように、この美しいキャンパスを学生が中心になり、キャンパスの愛好家たちもいっしょに参加して維持していかれるようなことはできないものでしょうか。専門家の協力も得、地域にも喜ばれるキャンパス造りを、みんなの手でできないものか。もしそのような会が誕生した時には、その人たちの作業場としても、あるいは集会所としても、この旧体育館はぜひ必要だと思っています。

おわりに

学生をはじめ学内の方は勿論、55,000人の卒業生も、そして本学を愛する多くの方々、その一人一人が本学にとってかけがえのない宝です。90周年を迎えた今、特に創設の準備の段階から関わられたアメリカ、カナダの宣教師、そして本国にあって彼等を支え、財政的にも貢献した教会の人々のことを思い起こしています。これらのおびたしい証人に囲まれて、私たちは今ここに立っているのだ、ということをおもいます。現在たまたま責任を負わされている一部の者が、本学の重要な宝物の命を断つことが、果たして許される行為なのか、問いたいと思います。本学最古の貴重な建物の一つであるこの旧体育館が重要文化財として生き残る道を、ぜひ探っていただきたいと切望いたします。

学生が旧体の保存を願って要望書を提出したことを聞き、それを支援しようと卒業生に呼びかけ署名をお願いしました。短い期間でしたが、496人（3.14現在）の方がしてくれました。今日もご署名いただけますので、お願いいたします。（3.23現在 567人）

今日のシンポジウムが旧体の終焉を飾るものではなく、新しい出発の礎となることを願って、拙い話を終わります。



創立 15 周年記念晩餐会（1933 年）

中央最後列にライシャワー夫妻の姿もみえる



現代のフォークダンス部の練習風景

石井 斎藤先生、ありがとうございました。今の斎藤先生のお話にもありましたが、この旧体育館——それから東寮もそうですが——は、いろいろな考えが込められている建物だということは、調べるとよくわかります。本学の学生として、自分たちの研究として、そういうことを調べてくれた卒業生の田代桃子さんから一言いただきたいと思います。田代桃子さんの研究は、先ほど鳥越先生のお話にもありましたが、2008年6月に私たち教員が「旧体解体を再考してほしい」という署名運動をしたきっかけにもなった研究です。それから、同じ研究を引き続きしている斎藤治子さんも、いっしょにお願いします。

4—2 田代桃子（2006年文理学部哲学科卒・2008年大学院哲学専攻修了）

斎藤治子（現代文化学部コミュニケーション学科2年）

田代 皆さま、こんにちは。2008年度に修士課程を卒業いたしました田代桃子と申します。本日は旧体育館に深い思い入れを持つ卒業生のひとりとして、少しお話しさせていただくことになりました。こんなに大勢の方の前でお話しするのは、あまり慣れていませんので、大変緊張しているのですが、どうぞよろしくお願いたします。

斎藤 こんにちは。現代文化学部コミュニケーション学科2年の斎藤治子と申します。昨年と今年に続きまして、田代先輩から研究を引き継ぎまして続けております。挨拶はこれくらいにして、田代先輩にマイクを返します。

田代 まず私と旧体育館の関わりですが、そもそもこの東京女子大学では体育の授業が必修となっておりまして、私が学部生の頃には2年間必修でした。その後も、体育の先生方が非常に魅力的な授業をたくさんそろえてくださっていましたので、単位とは関係なく、3年も4年も、この体育館で体を動かしてまいりました。1年生の頃からこの体育館のことは、可愛らしくて優雅で、私は女子大らしいと思うのですが、そのように思って非常に愛着を持っておりました。ですから解体の話聞いた時には非常に驚きましたし、残念で悲しく思いました。

その後、ふだん何気なく使っていて、そこにあるのが当たり前存在になっていたこの旧体育館に、漠然とした言い方にはなるのですが、「光を当てたい」と思いまして、仲間たちとこの場所でイベント活動を行ったり、研究を行ったりして、卒業の日までこの校舎に真剣に向き合っていました。そのことについて、本日は少しお話しいたします。

イベント「旧体で踊る、舞う、翔ける！」

最初に「何をしようか」と考えて思い当たったのは、ここを会場にしてイベントを行うことでして、それは2007年3月3日、ちょうど雛祭りの日に踊りのイベントを開催いたしました。体育の授業で「日本の踊り」という民俗舞踊の授業がございまして、私たちはそこで新潟県の綾子舞（あやこまい）という踊りを習っておりました。非常に素敵で優雅な踊りでございましたので、この体育館で舞うにはピッタリなのではないか、と思いました。あとはフォークダンスクラブにも参加してもらいまして、踊り手も、見に来てくださった方々も両方ともに楽しめる非常に有意義なイベントに

なりました。

また、その日はせっかくの機会ということで、普段ではないような活用の仕方をしまして、それは一言で言えば「この建物を丸ごと使った」ということになります。普段はフロアはフロア、それから今ちょっと窓が開いていますけれど、あそこは講義室ですが、講義室は講義室というふうに、各部屋は別々に使われていますが、そのイベントの時には窓を開け放して、講義室からもフロアを鑑賞できるようにしました。また、ちょうど皆さま方の後ろになりますが、そこは通路になっておりまして普段は立入禁止ですが、そこも開け放して掃除をして歓談できる場所にしました。それから2階のベランダに鉢が備え付けられているのですが、そこにお花を生けたりしまして演出を凝らしました。その鉢には本日も素敵なお花が生けてありますので、後ほど休憩の際にでも、どうぞご覧になってください。

このようにそのイベントでは、主催者側も楽しみながらやりました。使ってみるとわかるのですが、どんな花を生けようとか、ここの設営はどんなふうにしようとか、次はこんなイベントをやったら面白いのではとか、いろいろと想像をかき立てられたのです。それはきっとこの建物自体に魅力が備わっていることの証なのだろうと思いますし、いろいろな活用の可能性がまだまだ秘められていることの証なのだろうと思います。後ほど、この体育館の活用法について、いろいろとお話を伺えると思いますので、楽しみにしております。

学生研究奨励費研究「東京女子大学の旧体育館を中心とする校舎の研究」

次に東京女子大学学会の制度で、学生研究奨励費という制度があるのですが、それに「旧体育館の研究」を応募しまして、研究と言えるものでもないお恥ずかしいものなのですが、それについてお話しいたします。メンバーはみんな卒論やら修論やらを抱えておりまして、私も修論の指導教官に「こんな修論で忙しい時に、何をやっているのだ」と怒られるのではないかとあって、最初は隠れてコソコソ研究に加わっておりました。

研究しようと思ったのはいいのですが、建築についてはみんな素人ですし、どんなふうに調べようかと悩みました。それで主にこの大学の歴史や、創立者たちの教育理念をもとに体育館の姿を浮かび上がらせようと試みました。その中でも特に重要になりますのが、創立に関わった安井てつやライシャワー等が、体育そして体育館に寄せた期待です。安井てつは、体育を教育方針の一つに掲げ、「教育は全人間を造ることを目的とし、学問とともに健康な身体を造るのは体育である」と、その必要性を説きました。そしてそれを実践する場として、この旧体育館に非常に大きな期待を寄せておりました。

またライシャワーは、体育とともに社交的美徳を養う場として、この旧体育館に社交館としての役割を持たせようとしてしました。この「社交」という概念が難しく、この研究では厳密に定義付けることができなかつたのですが、ひとまずはこの「社交」を「人と人との関わりの中で自己を表現する能力」、やや安易ですが現代風に言えば「コミュニケーション能力」であると、取り敢えず定義いたしました。

特に自己表現力について申しますと、この旧体育館はそれを存分に発揮することを可能にする空間と言えるのではないかと考えました。自己を表現するには鑑賞者の存在が前提とされており、

見る者の視線の中で、見られる者が何らかのパフォーマンスを行うと言えると思うのですが、この社交館としての旧体育館は、私が今立っております、こちらの面を除いて、フロアに向かって三方から視線を自然に集める構造になっていると思います。この三方から、時には厳しく、時には温かい視線を送られながら、学生たちは自己を表現する力を養って来たのではないかと思います。ほんのかすめる程度ですが、このようなことが不十分ながら見えてまいりました。

最後に、この研究を通して強く実感したと言うか、思い知らされたことを一つ申し上げたいと思います。それは私たち学生が、この大学の歴史や創立者たちが掲げてきた教育理念に、いかに無知であったかということです。しかしこの伝統ある校舎一つをとって調査して、その存在に迫ろうとすれば、私たちはその歴史の一端にふれることができます。それは90年の伝統と、歴史ある校舎を持つ大学の特権であると、私は思います。これはビルの校舎などにはできないことだと思います。こんなことが、解体するかもしれないという話を聞かされてわかったのです。もう一つ、解体予定と言われていた東寮はすでに解体されてしまっていて、それはすごく惜しいことだったのですが、旧体育館はもう少し考える時間がほしいと思います。

大学の歴史や建学の精神を学ぶクラスを

最後に先生方、大学関係者の方々にお願いと言いますか、希望でもありますが、この大学の歴史や校舎、創立者たちの思想について、統一的に学ぶクラスが一つでもあればいいな、と思います。建築についてでも、デザインについてでも、創立に関わった新渡戸稲造の思想でも、何でもテーマにできると思います。卒業生を呼んだり、校舎を回りながら調べて学ぶクラスがあれば、非常に面白いのではないかと思います。そんな授業があれば、学生たちは自らが学ぶ大学に誇りを持つことができますし、より一層充実した学生生活を送れるのではないかと思います。それを一人の先生に言っただけでは聞き流されてしまうかもしれないので、大勢の方がいらっしゃる前で、つい最近まで在学学生だった者の意見として申し上げようと思いました。（会場笑い）

これで終わります。大変拙い話で恐縮でございました。最後までお聞きくださりまして、ありがとうございました。

旧体育館研究を引き継いだ在学学生として

齋藤 先輩の後にマイクを取らせていただいて、今、心臓がバクバクしています。私が研究に加わるきっかけは、入学式の時に初めて校門に入ってキャンパスを見た瞬間、緑の芝生の美しさと白い建物の何とも言えない絵のような美しさは、田舎から出てきた私には衝撃で、「こんな所で私は4年間過ごせるのだ」と、まず感動したことがあります。その時から、この大学の建物に興味を持ちました。

今は無き東寮ですが、緑の杜の中にありまして、その杜が鬱蒼という、陰湿な感じではなく、よく茂っていて、土がふかふかして、その土を踏んで中に入りますと、まるで冒険をしてたどり着いたような素敵な洋館がありました。それが以前、先輩方が使っていた寮だったということですが、その時はまだ部室として在学学生が使っておりましたので、中に入ることができまして、探検するような気持ちで中へ入りました。一つ一つの部屋が小さな個室になっていて、「ここでいろいろな先

輩方が過ごされたのだな」という思いを心に持つだけでも、歴史ある学校にいるのだという実感が湧きました。

それでこの建物がますます好きになって眺めていましたら、田代先輩と出会うことになりました。修士の先輩と1年生のヒヨッコですから、東寮に引き寄せてもらった本当に偶然の出会いでした。それで研究の機会をいただきました。

この研究を通じて、大学がどれほど深い懐を持って私たちを受け入れてくれているかを知ることができました。1年生にしてそのような知識を与えていただいたのは本当に幸せなことだったと思います。ですから、できれば私が在学のうちに、他の友人や在学生の皆さんにもそのような知識を共有していただいて、この大学をもっともっと好きになっていただければ、1年生で知ることができた私としては、役目が果たせるのではないかと考えて研究を続けてまいりました。

今年度の研究の成果については、今突然で、パッと申し上げられないのですが、これからまとめていきたいと思います。研究を続けていく対象があるということは非常に幸せだということが、今の私に言える言葉ですが、このような建物の中で教育を受けることができ、幸せだと思っています。本当にありがとうございます。

石井 田代さん、斎藤さん、ありがとうございました。多くは申し上げませんが、田代さんや斎藤さんのような学生がいる大学の教員であることを誇りに思います。田代さんの研究は、今日お渡ししましたシンポジウム資料の最後にありますので、あとでゆっくり読んでいただければと思います。

それでは次に特別ゲスト卒業生として、永井路子先生にお話ししたいと思っています。永井先生は、もちろん皆さんよくご存知のとおり、多くの作品を生み出された作家ですが、この東京女子大学の国語専攻部を卒業されています。今年も『岩倉具視』という作品で毎日芸術賞を受賞されるなど、本学にとっても非常に誇らしいことと思います。では、永井先生、よろしく願いいたします。どうぞお座りになって、お話しください。

5. 特別ゲスト卒業生

永井路子（1944年国語専攻部卒／作家）

永井 今、ご紹介にあずかりました永井路子と申します。1944年9月、国語専攻部を卒業いたしました。本名は黒板擴子と申しまして、歴史小説などを書いております。このようなシンポジウムが開かれたことを大変嬉しく、ありがたく思っている一人でございます。

旧体育館のことにつきまして、いろいろお話をしなければと思ったのですが、今まで斎藤先生、田代さん、いろいろな方がお話しくださいまして、この旧体育館は「ただの雨天体操場ではない」ということを、皆さんよく理解していただいたと思います。この体育館の持つ理念、機能、そしてその中に創立者たちの期待されたもの。そうしたことは、今までのお話の中で十分にご承知いただいたと思いますので、その部分は省略をしまして、私が体験したこと——つまりもっとくだけた東京女子大旧体育館物語みたいなものですが——をお話ししたいと思います。とにかく私は60年以上前

に卒業しているのですから、皆さん、その頃のことはご存知ないでしょう。

学生を育て、文化を育てた旧体育館

私が在学中にこの体育館でお芝居があったのです。『修善寺物語』、岡本綺堂の名作ですね。上級生たちがそれを演じられました。二年上の西本敦江さん、この人が名役者でありまして、夜叉王です。また——多分これからいらっしゃると思いますが——その一年下、つまり私よりも一学年上に水島富枝（現姓近藤）さんという方がいらっしゃいまして、この方が桂を、実に見事におやりになって大変感動いたしました。それから今は寂聴さんとなっている、瀬戸内さん、当時は晴美さんとおっしゃいまして、この方も、『修善寺物語』の時には出演され、舞台装置まで引き受けられたという話です。そういう方々の名演を、私などは息を呑んで見守った一人でございます。

ただそれだけのことなら、「なーんだ、学芸会をやったのか」などと、皆さん思うかもしれません。しかしこの主役を演じられた西本敦江さんは後に、福田恒存夫人になられました。ご存知のように福田恒存氏は演劇の指導者でいらっしゃいますが、恒存氏の演劇活動は敦江さんが支えられたと言っていると思うのです。また瀬戸内晴美さんは小説家になられました。



『修善寺物語』の出演者



もう一人、水島富枝さんは——今、近藤さんとおっしゃいますが——王朝継紙という美しい彩りの紙を使って、王朝風の雰囲気を出した紙をつくるという、大変ユニークなお仕事を始められて、現在全国的に広がっております。もう一つ、近藤さんがおやりになっているのは、源氏物語の原文を声に出して読むということです。これを30年続けていらした。今日もなさっているのだそうで、終わったら来られることになっていますから、私があまりしゃべらない方がいいかもしれませんが、この耳で聴く、声を出して読むというのが、古典の本来的な読み方聴き方なのです。昔のお姫様は脇息に寄りかかって女房が読むのを聴く、また女房は声に出して読むことによって古典を知る、ということがありました。それを近藤さんは試みていらっしゃる。これはここでお芝居を一所懸命になさった、その時のエロキューション（発声法）というのでしょうか、ここでの体験が影響していると思います。そのように考えてきますと、単なるお芝居をやった思い出というだけのことでなく、この旧体育館はいろいろなものを育ててくれた所だということ言えると思います。

また英語劇もここを舞台に演じられたということです。例えば「ロミオとジュリエット」など、あの二階の欄干のところにジュリエットがいて「おお」なんて演出でやったら、とてもよかったですろうと思います。そういう使い方もあったでしょう。

時代の犠牲をも刻んで

この旧体育館には悲しい歴史も刻まれております。戦争中、ここは岡田乾電池の工場にされまして、学生たちが勤労働員されました。また軍部は講堂を中島飛行機の軍需工場にするように迫ったのです。しかし当時の学長の石原謙先生は、ここは祈りの場所であり、神聖な場所であるから工場にはできない、と断られました。すると軍部からひどい圧力があまして、石原学長は特高に付け狙われて、歩くのもままならないほどに体が衰弱なさったということです。それで結局、東校舎が中島飛行機の工場になりました。この旧体育館は、その東校舎の中島飛行機工場に先駆けて岡田乾電池の工場とされ、学生たちとともに時代の犠牲となった健気な歴史も刻んできたのです。そうしたことも忘れてはいけないと思います。

狂言研究会・謡曲研究会の稽古場

戦後になってからも体育館はいろいろ活用されています。現在、狂言の第一人者である野村万作さん、この方がこの旧体育館で狂言の舞や謡のご指導をなさったのです。そこで万作さんに指導された卒業生が、半プロ級の狂言師におなりになって、もちろん舞台もなさいますが、万作さんを支えるスタッフの一人になっていらっしゃいます。この体育館からは、そういう方も生まれているのです。

実は戦後、能狂言の世界というのは危機に瀕しました。どうしたら存続できるか、ということで大変苦しみました。若い万作さんももちろんお悩みになったお一人で、そのことは書いていらっしゃいます。ですから新しい狂言を広めるために、この女子大で教えようというお気持ちになられたのだと思います。その意味では、ただ教えにきました、ああそうですか、ということではなくて、野村万作の歴史があり、そしてそれを旧体が受け入れた歴史が、ここにはあると思います。

さらに万作さんは当時、新しく地方開拓をなさいました。青森県や石川県のあたりに地方教室を開かれた。その青森の教室には、私のよく知っている英専の先輩が入門なさいまして、今でもお稽古を続けていらっしゃいます。ときに東京のおさらい会に出演なさるのを拝見しております。

もちろんそれ以前から、能楽師の先生が謡曲を教えにいらしています。喜多流の粟谷益二郎先生、息子さんの新太郎先生や菊生先生などが、ここでお稽古をつけてくださったのも拝見しておりますが、ここでは戦後の困難な時代を生きた万作さんの歴史を旧体育館と重ねてお話させていただきました。

三笠宮 — ダンス — 旧体

また皆さん、ご存知でしょうけれど、三笠宮が東京女子大の教壇に立たれていた時期があります。三笠宮はダンスがお好きだったのでしょか、この旧体でダンスを楽しまれた。しかもダンス部の顧問、あるいは名誉顧問ということで、長い間つながりを保たれたそうでございます。三笠宮はこのことをエッセイに書いていらっしゃいまして、その中に現在の湊学長が出てくるのです。その中に、東京女子大学で楽しい教授生活をしたということを書いておられます。

ですからこの旧体にも、いろいろとご記憶があるとは思いますが、皇族というのは、微妙に言うてはいけないことがたくさんあるのです。「残せ」と言ってもいけない、「潰せ」と言ってもいけ

ない、だから「うんうん」というようなことですが、もしここが残ったら「そりゃ、よかった」とおっしゃるに決まっています。なぜか。三笠宮は皇族であるとともに歴史学者です。歴史学者であれば、ここを潰していいとはお考えにならないと思います。そういう意味でいろいろな歴史を、三笠宮はご存知だと思いますから、もし湊学長が「残りました」ということをご報告されましたら、「それはよかったですね」とお喜びになるに決まっていると思うのです。そしてもし湊学長がもう一步踏み込んで、「ではもう一度お出でくださいますか」とお願いしたら、「行ってもいいよ」くらいのことをおっしゃるかもしれない。これは私の想像ですけど。

心に留めたい旧体固有の歴史

一つ一つはつまらない東京女子大学体育館物語かもしれませんが、ここには歴史のかけらが積み重ねられているのです。つまりここは体育館ではありますが、それ以外の機能がずいぶんあると思います。今までにもお話がありましたが、ただの体育館ではないし、さまざまな思いが、ライシャワーから安井学長に引き継がれて現在に至っているのだということで、今さら言うまでもないのですが、大変貴重な歴史的な産物だと思っております。

こうした話をしていると、「そんな話ばかりしていて、何の意味があるのだ」などと言う人もいます。実はね。しかしこの旧体育館が、東京女子大学の講堂とか教室とは違った意味での歴史をたくさん抱え込んでいるのだ、ということをお心に留めていただきたいと思います。

「形ある物はすべて滅びる」は壊す口実ではない

またこういうことを言いますと、よく反論があるのです。私も今回の保存運動に関わる中で聞いた覚えがあります。「形ある物はすべて滅びる」と。「だから建物がなくなってもいいんだ」というように言うのです。しかしこの言葉は、有意義な物を破壊する時の口実に使うべき言葉ではありません。もっと大きい「万物は流転する」という命題、あるいは「諸行無常」などの言葉とセットになっているのです。「夏草や兵どもが夢の跡」というのが、「形ある物は滅びる」という言葉の心です。そういう詠嘆を込めた使い方であるべきでして、ここに残っている有意義なものを壊すために使うべきものではないのです。

では「形あるものは必ず滅びる」というのは本当でしょうか。それでは法隆寺を壊してしまってもいいですか。「形ある物は壊れる」ということで、あの法隆寺を壊すことができるでしょうか。実は東京女子大学のこの旧体育館は、日本における法隆寺と同じように、東京女子大学における宝篋箱のような非常に大事な存在なのですから、自ら壊すべきものではない。私はそう考えております。

唯一無二の現存体育館

そうするとまた反論があるのですよ。うまいのね、理屈をこねるのがね。例えば「これだけ旧体の歴史が記憶されているのだから、思い出の中に生きればいい」と。(会場笑い) そうではありませんよ。まったく別の存在の必要性がもう一つあるのです。すなわち、日本の女子の高等教育機関の中で、このような建造物が残されていることはまったく希有なことでありまして、ここは声を大きくして申しますが、この旧体育館は大正時代にその目的で建造された唯一の建造物なのです。こ

れはもう一度よく考えていただきたいと思います。日本の建築史の中でも、学校関係の体育の建造物としては唯一、今に残るのがこの旧体なのです。この意義をもう一度ここで胸に刻んでいただきたいと思います。

近代女性史を拓く生きた歴史資料

最後に少し視野を広げて申しますと、日本の近代史の中で、女性の歴史が男性と同じく近代化されたかという点、そうではないのです。明治に入ってむしろ差別が大きくなって、戸籍の問題や選挙権がないとか、いろいろな差別が強められました。本学にも女性学研究所がありますね。そこでもう少し、そうしたことを研究していただきたいと思います。シンポジウムなども定期的に開いていただきたい。そしてシンポジウムの折には、「そうした時期にも拘わらず、この体育館が女子教育のためにできたのですよ」と、生きた歴史資料としてこの体育館を皆さんに見せてあげたらいかがでしょう。そのように実際に目で見れば、日本の歴史の中で東京女子大学がいかに苦心して新しいものを目指したか、そしてその背後には女性の苦しい歴史があったということも、実感していただけるとと思います。

時代が、歴史認識が、変わった！

これまでは壊してもらっては困るという話をしましたけれど、実はそれだけではございません。物の考え方が変わってきているのです。時代が変わっている。今までは壊して新しい物を建てればいい、という考えできましたけれど、現在は、「近代とは何か」と問う時代、近代というものが歴史になっているのです。今、明治百何十年かご存知ですか。明治142年ですよ。一世紀以上です。それはもう、ついこの間を除けば歴史の領分なのです。その中で「近代を見直そう」という気運が高まっています。

ここに持ってまいりましたのは『遺跡学研究』、日本遺跡学学会の機関誌です。この第5号の特集は「近代の遺産」となっています。要するに、近代はすでに歴史である。その中の遺産をどうすべきかと。以前は大昔の金の茶釜などばかりが値打ちがあると思っていましたけれど、そうではないということが、この一冊の中で強調されています。実はこの遺跡学会の会長であられる石井則孝先生が、そこにお出でくださっています。私は石井先生に大変ご指導をいただきました。以前、奈良文化財研究所におられました時に、私は唐招提寺の発掘跡を見せていただきました。歴史小説を書くには、文献史料とともに、そのような歴史的な事実——例えば遺跡など——を見なければ本当の意味での歴史小説は書けない、ということをお教えくださったのが、この石井先生なのです。後でご発言いただこうと思っておりますけれど、それ以来ずいぶんお世話になりました。先生は奈良文化財研究所をはじめ、あちこち重要なお仕事をなさいます、東京都埋蔵文化財センターの所長をなさいます。つまり東京の文化財はみんな石井先生がご存知なのです。それで残すべきは残すし、汐留は開発する代わりに詳細な記録を作って残すとか、そういうお仕事をなさっていらっしゃる方ですが、私がこのたびのことを申し上げましたら、お忙しいところをいらしてくださいました。

さて、この『遺跡学研究』第5号には「近代の遺産をどうするか」という非常に具体的な問題、その遺跡の活用などが挙げられております。このように時代が変わっているのです。以前は大昔の

ものだけが大事だと思っていましたが、そうではない。近現代も歴史なのだ。そして、その遺跡を大事にしよう。オリジナルを残すということは大事なのだ。そのように物の考え方が変わってきたのです。そういう視点で、もう一度この旧体育館を見直してはどうだろうか。それが私の考えているところでございます。

対立ではなく話し合い

これらのことは女子大の卒業生として申し上げることです。もちろん、今までの大学の方針に絶対反対だなんて、旗を振るつもりはまったくありません。そんなことより、まず話し合いたい。話し合いが一番大事です。今の世界情勢だってそうです。対立するばかりではやっていかれない時代でしょう。それなら大学側も胸を開いて、我々の言うことを受け止めていただきたい。私どもも本当にそのような気持ちでお話をしたい。私たちのグループ（東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会／略称・東女レーモンドの会）は大学側とお話し合いを持ったこともありますが、いつも私たちの発案で祈りをもって始めておりました。決して対立するとか、腕まくりして行ったわけではありません。女子大の基本的な祈りの精神から話し合いをしましょう、という姿勢で行動してきております。それがもっと具体的になればいいと思っております。

「残さないでよかった」ことは一度もない

最後に一つ、東京女子大の卒業生ということではなく、永井個人として付け加えさせていただきます。私は先頃、文化財保存に功績があったということで、和島誠一賞というものをいただきました。それほどのことにはしていないのですが……。しかしやはり歴史小説を書いておられますと、どうしてもそうしたことがひっかかってくる。潰しては困る、ということはどうしても言いたいのです。それで専門の歴史学者の先生方の後ろにくっついて、分厚い署名簿を文化庁に持って行ったこともあります。またその関係のシンポジウムに出たこともあります。

ただし、遺跡の保存というものは、うまくいく時もありますが、ダメな時も多いのです。あまり具体的に言うと失礼になるかもしれませんが、例えば奈良に長屋王邸というものがありませんでした。その跡地があるデパートの地所になってしまっていて、保存したかったのですが、うまくいきませんでした。そうしましたらしばらくしてから、そのデパートは経営が苦しくなりまして、それを見れば私のような俗物は言いたくなります。「あれは長屋王の崇りだ」と。（会場笑い）そのようなこともございました。

そうした経験を踏まえた上で、これだけは申し上げたいことがあります。「残してよかった」「残せばよかった」という経験はたびたびしております。しかし「残さないでよかった」ということは一度もないのです。これを私の話の結びといたします。

石井 永井先生、ありがとうございます。今日のお話は記録になりますので、また後でゆっくりと噛みしめたいと思いますが、全然知らなかったいろいろな物語がありましたし、もし旧体が残れば、そうした話がこれからもいろいろと生まれるのだらうと思いました。

文化財としての価値ということもおっしゃっていましたが、その側面について、次に東京大学大学院教授の鈴木博之先生からお話を伺いたいと思います。それでは鈴木先生、よろしく願いいたします。

6. 建築保存論からみた旧体育館 鈴木博之（東京大学大学院教授／建築史）

鈴木 ただいまご紹介いただきました、鈴木でございます。今の永井先生の魅力のあるお話を伺って、やはり体験を積まれた先生のお話が持つリアリティを非常に感じました。それから卒業生の田代さんの分析やご研究は、私にとっても勉強になった部分がございます。

今日、私は何をお話するか、ということでございますが、やはりこの建物を設計したレーモンドという建築家について、それからこの建物の持つ力をもう一度考えてみたいと思っております。

建築界における評価

実は世界の近代の建築を保存したり記録したりする団体として、ちょっと変な名前なのですが、DOCOMOMOという団体がございます。ドキュメンテーションのDO、コンサベーション（保存）のCO、それからモダン・ムーブメント（近代運動）でMO・MOということで、近代建築の保存と記録をする組織です。日本でもDOCOMOMO Japanが設立されて、私も、これから講演なさる松嶋先生もごいっしょですが、多くの建築家、建築史家が集まって、近代建築をリストアップして保存を訴えているわけです。無論この旧体育館も、東京女子大学全体も非常に重要な近代の遺産であると我々は考えております。保存すべき近代建築のDVDが数年前に作られておりまして、その3巻目は「学校施設」ということで、そこに——全部はすぐには記録できないので——自由学園と、この東京女子大学、それから明治大学、大学セミナーハウスと、四つのグループを記録しています。当然このキャンパスもその中に記録されています。

それから一昨年、レーモンドの展覧会が開かれまして、そこでは彼の作品をたどったわけですが、当然その中の大きな要素として、東京女子大学のキャンパスが取り上げられておりまして（神奈川県立近代美術館編集『アントニン&ノエミ・レーモンド』pp.19-21）、ちょっとご覧になりにくいのですが、こちら側（同、p.20）の下にまさしく旧体育館の写真が載せられております。広くいろいろな建築関係、展覧会関係者の中で、この建物の価値が認められ、高く評価されていると言っていいと思います。

本来ですと、東京女子大学の一群のレーモンドによる建築の中に、旧体育館も含まれてしかるべきですし、登録文化財になる時に当然入っていてしかるべきでありました。旧体育館が登録文化財から漏れているというのは、何だか「耳なし芳一」のような感じで、なぜか忘れちゃったのではないかと、いう気がします。この建物が大変魅力的であるということ、まずアピールしたいと思います。

モダニズム建築の面白さ

ただモダニズムの建築と言いますと、いわゆる明治の赤レンガの西洋館というものとは少し違う。そういう西洋館ですと、魅力的な塔があったり、入口周りがあったり、ステンドグラスがあったり、何かシンボリックに一つの要素に建物の魅力が集約されるところがあります。一方モダニズムの建築、つまり様式的なスタイルで作っていくのではない、次の時代の建築というのは、なにか素っ気なくてつかまえにくい、とおっしゃる方もおられます。けれども決してそういうことはなくて、特にこの旧体育館はそういう目で見ると大変チャーミングな建築ではないかと思えます。

一つは、様式的な装飾だけで建物の性格を表現しているのではなくて、非常に明快に柱と梁で組み合わさっている。しかも窓がそれぞれ入っていますから、皆さま方からは、こちらの非常に大きなガラスの面が見えると思えますし、私からは上と下の光が入る部分からよく外が見える。透明感のある、しかも骨格そのものが建築を作っている。これがモダニズムの面白さだと思います。これは「正しい原理」という言い方で、一九世紀の建築家たちが考えていった理論にはじまるもので、つまり建物を構成する原理が、すなわち建築そのものになっていく、という作られ方だと思います。

◆**シンメトリーの中の非対称** ただしこの建物は同時に、機械的にジャングルジムのような箱を作るのではなくて、たいへん変化があるのが魅力だという気がします。ご覧になっておわかりになる通り、基本的には左右対称、シンメトリーの構成になっている。ですから端正な印象を受けるのだと思います。しかし左側と右側は実はシンメトリーではありません。正面から右側を見ると、大きな柱が2本ございまして、ちょっと下がって階段周りがある。その階段の上に大きな天井と同じような屋根型が、印象的に繰り返されている。それをまた中で支える柱型があるのですが、それは下で途中で切れて奥へ下がっている。こういうことができるのは、鉄筋コンクリート建築だからです。石造やレンガ造だとかこういう表現はできない。

また正面から左側を見ると、やはり2本の柱があります。1本は上まで上がっていますが、1本は——先ほど永井先生が、ここで「ロミオとジュリエット」をするのにいい舞台だとおっしゃった所です——切れている。普通、こういうことをするとメチャクチャになってしまうのですが、全体に端正な形式感覚が見えて、しかも機械的な左右対称でない変化があって、なおかつ空間が閉じないでつながっている。そういうところが、この建築の魅力だと思います。

◆**単なる四角い箱にはない空間変化** それから先ほど田代さんがおっしゃいましたが、この平土間にいると三方から視線が集まるというのも、この建物は単に四角い箱を造っているのではなく、箱の間に——ちょうどその通路に当たる所ですが——スペースとスペースの間のフィルターのような空間があるわけです。それが非常に利いている。空間に奥行きがある。そこが観客席ともなるし、通路ともなるし、ワンクッション置かれる。単に四角い箱を並べていく構成ではない神経が見られる、という気がします。

◆**柱や梁の抽象化された装飾** もう一つは、この建物は柱と梁で明快に作られていると申しましたが、単に柱と梁ではなくて、微妙に繰り返しの痕跡のようなところが見られる。これがもっとゴテゴテすると様式建築になっていくわけですが、それが非常に抽象化されて、梁の部分には微妙に繰り返しの型が付けられている。しかも柱と梁の合う部分には細い溝が切つてある。コンクリートですから、1本でずっと打ってしまえばいいのですが、その辺の「分節」と言いますが、要素と要素をうまく

分節した構成になっている。これも初期のコンクリートのパイオニアの時代の面白い表現だという気がします。

◆「柱の溝のテニスボール」伝説 それを思いながら見ていると、あそここのところ（正面から向かって右側奥の柱の天井に近い部分）がとても面白い。柱の溝の部分に、テニスのボールとおぼしきものが三つくらいはさまっているのです。多分、在学生のお転婆娘が「ヤアッ」とやって、あそこへボールを入れたのだと思います。（会場笑い）僕はああいうものを大事に思っています。やはり学校が生き生きと使われているのだな、どんなお嬢さんがああいうことをやったのだろうと想像すると、大変に味わい深い状況です。そういう「伝説」を持てる建築である。それも大変魅力だと思います。



柱の溝のテニスボール

細部と全体：レーモンド初期建築物の魅力

レーモンドという建築家は非常に長きにわたって日本で仕事をしました人ですし、初期においては帝国ホテルを造りましたフランク・ロイド・ライトの下で働いて、その影響を受けながら出発をした人であります。

世界中で見た時に、鉄筋コンクリートの建築を作り上げていく上で、一番大きな影響力を持ったのは、フランスのオーギュスト・ペレという建築家です。そのペレの事務所にいたフォイアーシュタインという所員がレーモンドの事務所へやって来まして、その時期からレーモンドの建築はオーギュスト・ペレのコンクリートの使い方を参照するようになってくる。この東京女子大学のチャペルの塔は、ペレの代表的な作品であるル・ランシーの教会の塔をかなり意識したものだ、と多くの人が指摘しています。

さらに近代建築の中で、ル・コルビュジェというペレの次の世代に当たる建築家が出てまいります。レーモンドはそういう人の影響も受ける。大変に様式、あるいはスタイルを変遷させていく人です。この旧体育館はじめ東京女子大学の建築は、レーモンドの建築の初期と言ってよい時代のもので、旧体育館の中にはコンクリートのたいへん正直な構成法とともに、例えばベランダの鉢のようなものはライト風ですし、部屋にございます暖炉には、チェコのキュビズムと呼ばれるプリズムがあったスタイルが採り入れられています。

モダニズムの先駆けであるだけに、細部の構成と全体構成の魅力が非常に複雑に絡み合っていて面白い建築である、と思います。

次代のキャンパス創造は古い建物群を核に

こういう建築をぜひ残し続けていっていただきたいと思いますし、幸いにして東京女子大学のキャンパスには、複数の建築が群として存在している。ですから一つ一つだけではなくて、群として建物をうまく残し、その魅力を活用していく。そしてそれが次の時代のキャンパスの核になっていく。そういう発展をぜひなさってもらえれば、と思うところです。これは大学にとっても——変な言い方ですが——損な話ではない。キャンパスの魅力というのは、大学の魅力の非常に大きな要素になるものです。これからの時代には、その魅力の意味がさらに増えていくだろうと思っています。これだけ素晴らしい文化遺産を持っている。それを活用しない手はない、という感じがいたします。

以上が私の拝見させていただいた、この建物の魅力の一端です。話題の提供ということで、これで終わります。どうもありがとうございました。

石井 鈴木先生、ありがとうございました。それではここで休憩をはさみたいと思います。休憩時間にコメントペーパーを書いていらっしゃる方は提出していただきたいと思います。それから周りにいろいろなパネルが貼ってありますので、ご覧になってください。またこの建物の2階に上がって、素敵な部屋やテラスをご覧になっていただきたいと思います。

保存の要望書は日本建築学会の関東支部や、今お話しいただいた鈴木先生が代表をされているDOCOMOMO Japan、それから後でご紹介しますが、杉並区長からも最近、旧体育館保存の要望書が提出されていますので、ご覧になっていただければと思います。その他、この旧体の活用のイメージ図、永井先生の雑誌の記事、昨日の毎日新聞の記事などもパネルにしてありますので、ご覧になってください。

石井 次は松島建築研究所所長の松嶋哲英先生からお話を伺います。松嶋先生は旧体育館の耐震性について、設計図に基づいて診断をしてくださって、この体育館は補修をすればまだまだ保つという結論を出されています。今日は詳しいお話をお聞きできるということで、期待しております。どうぞよろしく願いいたします。

7. 耐震・改修問題と災害時の安全性 松嶋哲英（松島建築研究所所長／一級建築士）

松嶋 ご紹介いただきました松嶋です。どうぞよろしく願いいたします。失礼して、座って話をさせていただきます。私の話には20分間与えられておまして、右のパワーポイントに出ております順序で説明したいと思います。私もご講演いただいた鈴木先生と同じく、DOCOMOMO Japanのメンバーです。そのDOCOMOMO Japanから、この体育館の耐震性についてはどうなのか、という話をいただいて、何度かレーモンド事務所に通いまして、最終的には設計図を借りることができました。それで診断をいたしました。

1. 建設当時（1924年／大正13年）の構造技術

◆**耐震性能の歴史** この旧体育館ができた当時の時代的背景と言いますと、この建物は1924年の竣工です。それ以前、1906年にサンフランシスコで大きな地震があったのです。マグニチュード8.2でした。巨大地震でして、日本でもサンフランシスコで地震があったということで、佐野利器や中村達太郎などが渡米して、耐震性と耐火性能において、RC（鉄筋コンクリート）の建物が非常に強いということで注目しました。佐野利器は帰国後「家屋耐震構造論」というものを発表しまして、その時に初めて「震度」という言葉が使われ、それが今現在でもそのまま使われているのです。

その後、この旧体育館ができた時には、日本の場合ですと「市街下建築物法」という形で、水平震動0.1でよい、という時代だったのです。しかしこの建物を見ていただくと、先ほどからいろいろな方が説明されているように、非常に空間的にもしっかりしていますし、診断をすればするほど、この建物の素晴らしさを実感いたします。旧体育館自体の総重量が約450トンほどです。屋根から1階まで入れてすべての重さが450トン。そういう建物です。

◆**東寮図面に内藤多仲の印** ちなみに、佐野利器がサンフランシスコから帰国後「家屋耐震構造論」を発表して、その研究は脈々と東大隈で続いて来ていたのです。内藤多仲（東大卒。耐震壁による耐震構造理論を打ち立て、この理論により建てた興銀ビルは竣工直後に関東大震災を受けたが、無事であった）は、レーモンドが東寮を建てる時に相談を受けたという事情で、図面に「内藤」という判子が押してあったのだそうです。それは、東寮を壊す時に実測図を書いてくださった人から伺った話です。

2. 現在の構造設計と旧体育館の耐震診断

◆**一次診断** 次に現在の構造設計と耐震診断ということで、私がいたしましたのは、この建物の一次診断です。実際に診断をするには、一次、二次、三次という三つの方法があります。一次診断というのは柱の断面積と、壁の断面積を計算して、それが建物の重さに耐えられるかどうかをチェックする方法です。構造耐震判定指標という形で、Isoという数値で表されるのですが、一次診断であればIso値が0.8以上あればよい、ということになっています。

ただ旧体育館を診断するにあたって、建物のコンクリートの強度はどうなのか、ということが非常に心配になって、コア抜き検査（壁のコンクリートを筒状に抜き取って分析する検査）をさせてほしいとか、いろいろなことをお願いしたのですが、いずれも叶いませんでした。東寮を壊した時に、清水建設がコンクリート強度を確かめた、という情報を得たものですから、ぜひそのデータがほしいと頼みました。最初のうちは「出してもいいよ」という話があったのですが、結果としては出していただけませんでした。

そういうわけで、私としては当時のコンクリートの流通性と言いますか、社会性のものを含めて、何種類かの形に分けて計算してみました。例えば80キロのコンクリートの強度でどうなのか。次の段階として、135キロならばどうなのかと、そういう形で段階的に分けて計算しました。結果として90キロニュートン、すなわち当時の強度からすると、半分ぐらいのコンクリート強度に落としても、Iso値が1.0を確保できる、という確信を得たものですから、「耐震性能がありますよ」という

回答を、DOCOMOMO Japanを通して、大学にも伝えてもらった次第です。

◆**二次・三次診断** この建物は一次診断です、と申し上げましたが、二次診断というのは柱と壁の断面はもちろんですが、それに柱や壁の鉄筋量（どのくらいの鉄筋が入っているか）を精査して診断をします。また三次診断というのは、それらに加えて梁の鉄筋はどうか、まで精査します。結局判断する材料としては、この建物のどこが一番弱いのか——専門家の間では「終局強度」と言っています——を、柱なら柱、壁なら壁、梁なら梁で決めていって、その弱いところを集計して耐震性の有無を判断します。

◆**重要度係数** 診断するにあたってはもう一つ、建物の重要度係数というものがあります。例えば震災を受けた時に避難場所になるような公共の建築物——学校などもそうです——については、例えば1.25倍にしておくとか。あるいはコンピュータのセンターのような、壊れては困る建物であれば、1.5倍にするという細かい規定があるのです。それもトータルで考えても1.0を十分に満足していて、コンクリート強度を90キロ（普通の半分）にしても一次診断ではOKになっている、という状況です。

◆**建物の加重** 旧体育館の構造的なものをいろいろと考えていきますと、実際にはこの建物には構造計算書も、構造図もありませんでした。意匠図だけ、すなわち建築の平面図、立面図、断面図、それから矩形図、階段の詳細図などもありました。そうした図から推測して、細かく見て、この建物がもっている加重を拾わないと、次のステップに進めないのです。例えば屋根が瓦葺き——今は鉄板が被っていますけれど、実際には瓦葺きなのです——で、瓦の下にはどういったスラブがあるのかとか、そうしたことまで図面の中から拾って、加重を集計しています。

3. 旧体育館の構造設計

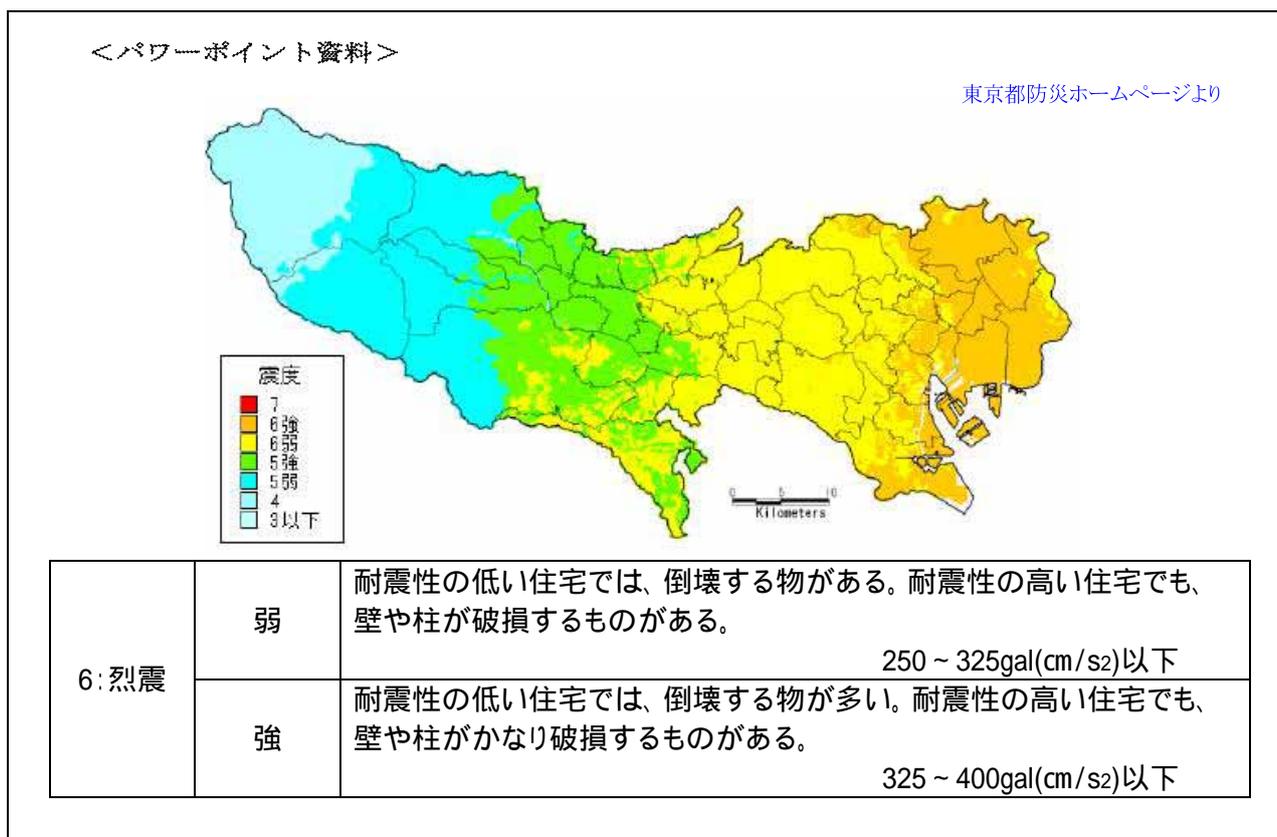
◆**硬い両ウイング** この建物を見ていただくと、柱と言いますか、見付（柱の幅）の方からすると非常に狭くて、かなり揺れて貧弱に見えると思われるかもしれません。今、パワーポイントに出しておりますが、皆さんがいらっしゃるの真ん中のホールですが、両サイドに構造体（2階建ての講義室の部分）すなわち塊があります。これを構造の上では両ウイングと称しています。実際、建物自体は柱と梁、それから壁でできておりますので、壁付きラーメン構造という構造形態をとっています。ただ両ウイングについては、まったく壁式なのです。20センチくらいの壁がかなりしっかり入っていて、両ウイングは建物としては「硬い」と言いますか、耐震性が非常に高いゾーンになっています。

◆**庇により揺れを両ウイングに流す** そしてレーモンドさんがデザインされた時に、この見付の柱を細く見せようということで、こちらに庇（テラスの床にあたる部分）が出ていますし、2階の屋根面にも庇が出ているのですが、その庇を伝って水平に揺られた時の力を両ウイングに流すという構造形態がとられて、非常に経済設計になっています。デザインで細く見せたいという考えがたくさん含まれていると思います。

◆**自重を減らす工夫** また鉄筋コンクリートですから、自重が非常に重いのです。重い建物は揺られると弱いという感覚になりますので、その加重を減らすために両ウイングの屋根は木造なのです。またスラブ（コンクリート製の板）については、Rスラブ（曲面スラブ）と言いまして、普通

に平に打てば少なくとも12～15センチくらいの厚さがほしいのですが、自重を減らすために、スラブにRが付いている。多分最も薄いところでは、60～80mmくらいと、図面の中から読んでいます。

◆**立地条件** それから重要なのはこの建物の立地条件なのですが、今パワーポイントに出ておりますのは、東京都の防災局から出された震度マップです。真ん中の杉並区の赤い点の所は、気象庁の震度階で言いますと、震度6という地域に該当すると思います。震度6という所ですと、地表面の揺れで250galから、震度6強ですと400galぐらいになります。それを簡単に水平震度に換算しますと、0.25～0.4ぐらいの地域だと思えます。ですから下町の方を見ていくと、かなり色が赤くなっていて、そういう場所とこの旧体が建っている場所では震度は当然違ってきます。



◆**フロアを下げて揺れを減少させる** そして今、皆さんが座っていらっしゃるフロアは、グラウンド面よりも少し下がっています。80センチくらい下がっているかと思えます。これも地震の時に揺れを小さくするために埋められている形だと思えます。

4. 災害時の安全性

◆**建築家協会の災害対策委員** 私は日本建築家協会に所属しております、その中の災害対策委員でもあります。ですから震度6弱ですと、必ず建築被害が出ると言われておりますので、震度6の地震の情報があれば、翌日には協会に集まって災害対策委員会を立ち上げて、どういう形で調査に入るかとか、市民の皆さんの相談に応じるかなどを協議します。1日も早く現地へ入って被災状況を調べて対策を講じるようにしています。この前には新潟で2件、中越地震と中越沖地震があり

ました。そもそも災害対策委員会ができたのは阪神大震災の時です。この時には4日目に現地へ入って被災地を見て回り、その後はボランティアでどういう対策を立てられるかを考えました。

◆**防災委員の目から見た旧体** そうした活動をしている者の目から見て、この旧体育館は先ほど申しました震度でいくと——いろいろな震度階で建物が壊れるのはどの程度かということが、今までの経験もありますし、文献にも明記されていますので——多分震度6強の地震であれば、この白い壁に斜めの亀裂が入る。それが落下するかどうかは判断できない。地震の来る方向と建物の持っている粘りみたいなものから想像しなければいけないと思います。

◆**旧体裏に広がる開放的空間** それでDOCOMOMO Japanの中で、いろいろと検討した結果を絵にしてありますので、見ていただきたいと思います。このパース（→図2）はかなり正確に作られています。図面を基にして、旧体育館の裏側を残し、隣りの新体育館を解体して良い空間にしたいという考え方で作ったものです。80メートル×120～130メートルの非常に良い空間になるのではないかと考えております。実際には旧体育館の裏面は俯瞰して見られない状態ですが、隣りの新体育館を壊して広場を作ると、いかにデザインされているかがよくわかると思います。図面を見ていただいてもわかるのですが、レーモンドは学園全体の計画の中で、隅々までデザインしたということがよくわかると思います。

これが（→図2）新しくできた体育館棟と、頭に丸い屋根がついているのが旧体育館です。DOCOMOMOの中で検討した範囲では、丸い部分をガラス張りにして楽しんでいただく。そしてまた防災広場にもなるのだらうと考えています。これは（→図2）何だか狭いように見えますけれど、幅が80メートルほどあって、空間的には非常に開放された良い空間になると思います。

◆**新体育館棟と旧体育館の間隔** 新しく造られた新棟とこの旧体育館との間が狭くて防災上問題があるという話も伺っていますが、決してそんなことはありません。例えば延焼の恐れがある部分ということであれば、旧体育館の新棟側のウイングは壁がかなり多いものですから、開口部のガラスを変えればいいたらうと思っています。

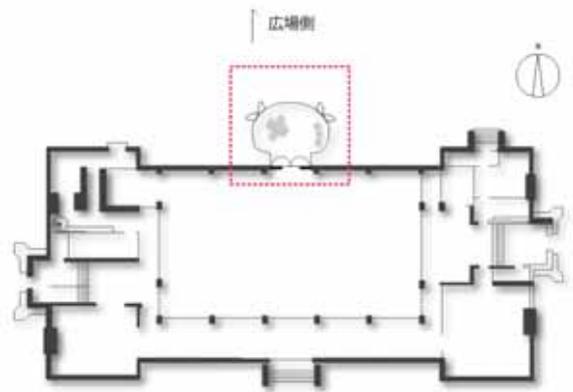
◆**漏水のメンテナンス** また旧体のメンテナンスについても、天井面を見ていただきますと、右と左に漏水の跡がありますけれど、それは屋根を直せばすむ話であって、構造的にどうこうする必要はまずないだらうと判断しております。

◆**消防との関係** それから防災関係で言いますと、阪神大震災の時には道が狭くて消防車が通れなかったり、倒れたりとか、いろいろなことがあったのですが、消防庁とか消防署もいろいろ勉強して、現在東京都が中心になって、狭い道、それから物資を輸送する幹線道路の経路に当たる建物について耐震診断をして、その診断の費用も国庫で約2分の1を負担しているはずですが、また建物の補強が必要であれば、補強費用の何分の1か——上限はありますけれど——を負担してくれるはずですが。それから大学などの中については、消防署もよく情報をつかんでおりまして、どこで災害が発生した場合にはどういう経路で、どういう方法でというのはシミュレーションしています。また周囲に空間もありますので、そのことをあまり神経質に問題にする必要はないように感じます。

◆**震災とスチールサッシ** 震災時にはどうしてもガラス面に危険があります。旧体育館の前面を見ていただきますと、スチールのサッシです。ガラスを昔ながらのパテで止めていますので、パテが硬くなっているため変形に追従できずに落ちる、という話もあるかと思っています。デッキが出てい

(図2)

旧体育館を残したオープン・スペースの一例



画像提供： 兼松紘一郎（株式会社 兼松設計／DOCOMOMO Japan 幹事長）

石井 松嶋先生ありがとうございました。技術的な内容なので、パッと聞いてすべてを理解するのはなかなか難しいでしょう。本当はもっと細かくいろいろな質問をしたいところですが、何かお聞きになりたいことがあれば、後ほど討議の時に質問するということにします。ただこの旧体育館をぜひ残したいということであれば、その可能性は十分にある、建物自体についても、周囲を考えた防災全体としても、可能性は大いにありそうだというお話だったと思います。それについてキャンパス整備を進めている人たちと議論したい、というのが私たちの強い願いなのです。

最後の話題提供になりますが、本学の外国語研究室の土合文夫先生から、旧体はこんなふうに見えるのではないかと、という提案をお話しただけだと思います。

8. 旧体育館保存後の活用法についての一提案——叩き台として

土合文夫（本学教授／外国語研究室）

土合 座って失礼します。この大学でドイツ語を担当しています土合と申します。私はどちらかと言うと争いを好まない性格、草食動物的な人間のつもりなのですが、この旧体、それ以前の東寮の解体については、やはりここで発言をしておかなければ、これは壊されるに決まっているということがはっきりしていましたので、自分の性格を敢えて曲げて、教授会場で学部長や学長と一戦交えるということが続きました。あいつは尖ったことばかり言うやつだという印象を同僚の間に与えてしまったとすれば、私としては非常に心外なことなのです。

今日は、この旧体育館が保存されることを前提にした、保存後の活用法について提言する役割をいただきまして、非常に穏やかな話をする事ができる、ということで喜んでおります。

旧体育館の必要性

新・旧体育館は新しい体育館で機能が代替されると言われています。現在、新体育館と旧体育館で体育——我々は健康・運動科学と呼んでいますが——の授業と、公認の体育系サークルの活動をほとんどまかなっていますが、実はそれでも足りない状況なのです。旧体育館の稼働率は非常に高い。100パーセントに近いと思います。ですから、ここを使えるものなら使いたいと思っているサークルもあるでしょう。それから非公認サークルというのがあって、彼らは使いたくても使えない。それから文化系サークルでも、ここで練習したいとか、発表会をしたいという希望を持っているところはあると思うのですが、そういうところも時間的な空きがなくて使えない。ですから現在の新・旧体育館が担っている機能を新体育館でまかなったとしても、実は足りていないのです。そのためのバッファーとして、あるいは非公認サークルや文化系サークルにも活用の機会を与えるためにも、やはりこの旧体育館のスペースは不可欠なのです。

オープンスペースを「憩いの広場」にするために

新体育館はやむを得ず壊すとして、そこにオープンスペース——仮に「憩いの広場」と申し上げておきましょう——を設ける構想には我々も反対しません。確かに現状では、学生たちが自由に憩

える空間が不足していることは事実です。正門を入ったところに芝生があります。あそこはどうか、とお思いになるでしょうが、あそこで学生がうろうろしていると、正面から見えて目障りだと大学側は言うておまして、あの芝生には入らせない方針です。だから奥のスペースならばいいだろうと。ともかく「憩いの広場」をつくることには、我々はまったく反対ではありません。

しかし旧体まで破壊して、だだっ広い空間をあけたところで、それがどれだけ憩いの広場として機能するかというと、非常に疑問です。例えば、雨が降れば使えません。風が吹けば使いにくい。寒くても、カンカン照りでも快適には使えない。それに夜になれば使えません。あるいは今の女子学生たちは紫外線による肌のダメージを気にして、春なのに日傘などをさしている。確かに僕らの年になると、日に当たってきたところはシミだらけ、当たらなかったところはきれいだ、はつきりと長年の影響が出てきますので、若い頃からそういう配慮をしておいた方がいいのかな、とは思っています。

ですから巨大な広場をつくったところで、年間を通じてその巨大空間が、大学が意図しているような「憩いの広場」として機能するかというと難しい。たとえ機能するとしても、非常に限られた時間に過ぎなくなるでしょう。

「憩いの広場」の「寄る辺」として社交館を復活

そこで、旧体に対する発想を転換して、今まで通りサークルの活動に使うのはもちろんですが、それと重ねて、屋根がついた、天候に左右されずに使える「憩いの広場」の一部として考えたらいいのではないか。旧体は体育館としてだけでなく、社交館の役割があったわけですが、最近では社交館の役割の方はちょっと途絶えていますから、「憩いの広場」の一部として考えれば、その社交館的な役割を復活させる契機にもなるのではないかと考えます。そういう活用法を提案したいと思います。

一言付け加えますと、広い空間さえ開ければ人がそこに集まってくるだろうという発想は、人間の自然な習性を全然理解していない考えだと思います。人間も動物ですが、動物には身を守るものがない広い空間の真ん中に身を置くことに対する本能的な恐怖感のような感覚があるのではないのでしょうか。例えば魚を考えても、広い海の中のどこにでも安住するかと言えば、そんなことはなくて、浅瀬だとか、難破船の周りだとか、流れ藻の下だとか、要するに「寄る辺」のある所、どこか身を寄せるもののある所でなければ、なかなか居着かないものです。我々は魚ではありませんし、旧体を難破船だと言うつもりもありませんが、広場は広場として評価した上で、その一部をなす「寄る辺」としての旧体を、やはり維持する必要があるのではないかと思います。

社交館の復活ということに話を戻すと、例えば左右両ウイングの部屋を見ていただいたと思いますが、素敵なお部屋があります。あるいはテラス。普段は開けていませんが、例えばそこにテーブルや椅子を置いてアットホームな空間をつかって、学生が自由にくつろげて、談笑できる、あるいは教職員も交えて楽しめる、そういう場を提供できる可能性もあります。例えばそこに外部の業者に依頼してコーヒーショップをつくるというのも一案ではないかと思います。

「舞台」としての旧体育館

また、この旧体育館のフロアの立地上、構造上の大きな魅力の一つは、内部のギャラリーからも三方からの視線があり、建物の外に向かっても開かれ、しかもその外部が割合人通りの多い通路だということにあります。フロア自体が一種の舞台のような機能を果たしている建物というのは、このキャンパスの中に旧体育館以外ないのです。第三者の目を意識することができるということは、自己満足に浸ることなく、より高い段階に到達するために非常に有意義なことではないでしょうか。

この利点を生かす意味で、従来の体育系公認サークルの他に、非公認サークルや文化系サークルにも、練習や小規模な発表会、あるいは音楽系サークルの演奏会の場として広く開放することも考えられます。あるいは学会が開かれた場合など、その後の懇親会の会場に、ここはとてもよいのではないかと思います。また、稼働率に余裕があれば、同窓生の皆さんのサークルや講習会などの場として使っていただくことも考えられます。

それから皆さん、すでにお気づきでしょうが、この旧体は非常に音響特性がいいのです。チャペルもまた豊かな音響をもっていますが、旧体の音響もそれに匹敵するものです。このこと一つをとっても、この旧体は十分に保存するに値するのではないかと思います。

広場と旧体を一体化させるエントランスホール

先ほど松嶋先生のパワーポイントで、新体育館の跡地を活用した広場のパースを拝見しました。広場と一体化するためには、現状のようにお尻を向けているのはまずいので、旧体の背面に出入り口を開ける必要があるのではないかと、私たちも考えてはいたのですが、ただそうすると、このフロアの使い方が難しくなってきます。そこで、今日はそのことには敢えて触れまいと思っていたのですが、このパースのように、新しい出入り口の前面にエントランスホールと言うのでしょうか、可愛らしいスペースを付け加えると、魔法のように旧体から後ろの広場に向かう方向性がはっきりと打ち出されますし、広場との一体感も生まれます。これは我々素人にはとても思いつかない。やはり専門家の手によるものと、すっかり感心しました。

ただし、このプランを実現するためには、先ほどお話したフロアの使い方とどう折り合いをつけてゆくのかわという問題を解決しなければなりません。フロアにはフロアでなければできない使い方がありますし、かといって、広場に直接連続する空間というイメージにも捨て難いものがあります。この二つを両立させる名案がないものか、旧体の保存が決まったらさっそく衆知を集めて頭を絞る必要があります。侃々諤々の議論になるかもしれませんが、きっとその場をさぞや生産的で心躍るものになるのではないかと、今から楽しみです。

旧体の活用法については、いろいろな方がいろいろなお考えをお持ちでしょうが、その呼び水として、二つばかり保存後のプランを述べました。どうもありがとうございました。

石井 土合先生、ありがとうございました。予定ではこれから全体討議をするということになっていました。当初の予定ではいくつかテーマを分けて伺おうと思っていたのですが、時計を見ると

すでに4時半間近ということで、それは断念したいと思います。会場からぜひ発言したいということがあれば、どのような問題についてでも結構ですので、発言をいただきたいと思います。

9. 全体討議

石井 ご発言をいただく前に、議論の一つの土台になるかと思ひまして、今日お渡しした資料冊子に「なぜ旧体育館を解体しなければならないか——理事会・キャンパス整備委員会側の説明とそれに対する疑問」と題する3枚綴りのレジュメをはさんであります。細かいことは後でお読みください。これは教授会やその他いろいろな場で、私たちが「なぜ旧体育館を解体しなければいけないのか」と問うたのに対してなされたいろいろな説明です。ご覧いただければわかると思いますが、いずれも当事者と専門家を交えての議論が必要なことばかりです。

◆キャンパスの安全性に関する問題 大きくは、まず「1. キャンパスの安全性に関する問題」。旧体育館の耐震性の問題と、周辺を含めた防災上の観点から見たオープンスペースの必要性ということ。なぜ旧体を残してはいけないのか、ということが問題になっています。

◆財政上の問題 それから「2. 財政上の問題」。どんなことをするにもやはりお金が関わってくる。このキャンパスにはすでに登録有形文化財が7棟あります。大学側は、その改修維持に非常にお金がかかると言っています。例えば6号館では、1億円のつもりが2億円かかったとか、そういう問題が今後も発生する。にもかかわらず、7棟を守ることは高く評価してもらいたいと、理事会やキャンパス整備委員会は言っています。私たちもその点については高く評価したいと思ひますし、そこを守れないようでは、この大学が在る意味すら薄れてくるような気もするので、これはどうしてもやらなければいけない。だから「その上のプラスαはちょっと耐えられない」という話が出てくるわけです。しかし「それには具体的にどのくらいの費用が考えられるのか」と問いかけても、その数字は今まで一切、出てきていません。学長さえも「具体的な数字は聞かせてもらえない」とおっしゃっていました。

◆手続き上の問題 またもう一つの問題としては、「3. 手続き上の問題」です。解体を決めるに当たって、全学的な意見の集約を図り、十分な検討をして出した結論だというわけですが、鳥越先生のお話にもあった通り、十分な議論が尽くされたとは到底言えない。そもそも、解体しなければいけない理由はこれこれです、という説明とともに、解体した方がいいですか、悪いですか、という問いかけというものはなされていません。私たち教職員は、解体が避けられないなら、それについて具体的な説明をしてくださいと何度もお願いをしてきました。その返事を待っていたのですが、説明会は開いていただけないということが、つい最近決定的に明らかになったものですから、それでは私たちがシンポジウムを開いて、この問題を考えてみましょうということになりました。それが今日の集まりなのです。だから「今まで何をしていたのか」と、特に外部の人たちは思われるかもしれませんが、私たちとしては、理事会なりの真摯な対応を今まで待っていたということです。それも少し難しいかな、というのが今の状況なのです。

それで解体不可避の理由は、いろいろここに書いてありますが、わかっている限りではどれも決

定的なものではない。旧体育館を残したいと考えた時に、それを否定する理由がわからないという状況です。お金の問題については、その額が具体的に見えてくれば、募金ですとか、いろいろな方法がありますが、そういう議論もできないのが現状です。細かくは、読んでいただければ、今までどんな議論があったのか、そして全然決着していないし、納得することもできないという状況が、わかっただけだと思います。

そのくらいにしまして、ご意見をいただきたいと思います。まず外部の方から少しコメントをいただければと思います。レーモンド設計事務所の設計部長の渡辺さんがお見えになっていますので、一言コメントをいただければと思います。それで、まことに申し訳ありませんが、なるべく短めにお願ひしたいと思います。

レーモンド設計事務所設計部長

渡辺 レーモンド設計事務所に勤務しております渡辺でございます。突然ご指名いただきまして、びっくりしておりますが、本日のシンポジウムに参加しまして、この建物——私の事務所の創設者のアントニン・レーモンドが設計した建物ですが——に対するパネリストの皆さまはじめ、本学の在學生、OGの方々の思いを耳にしまして、たいへん感激と感動をしております。レーモンドの事務所に勤務している者として、あまり生々しいことはこの場では申し上げにくいことがございますが、やはりこの建物が皆さまに愛され、これからも大事に使っていただければ、という思いを強く持っております。ありがとうございました。

石井 ありがとうございました。今日は数名コメンテーターをお願いしていますが、次に、日本遺跡学会会長の石井則孝先生にお話をいただければと思います。

日本遺跡学会会長

石井（則孝） 石井と申します。永井先生から名前が出てしまいまして、ヤバイなあ、と思っておりますらご指名でございますので、一言だけ述べます。私は考古学が専門ですが、考古学でも飛鳥、奈良、平安、鎌倉という場合には、建築をやらなければなりません。そういう意味では日本の歴史ある建築は非常に大事でございます。今日のレジュメの中で、2008年9月に理事長の回答がございます。「意見は聞いたが、変更する根拠にはなり得ない」と。それで、その解体の理由が「災害時の避難スペース、憩いの場の確保、老朽化、耐震性への不安、補修改修のための資金不足、火災時における消防車の走路確保」です。これらの理由はすべて、今日ご出席の250人の方々、500個の目でもって消すことができます。ですから多分、今回のシンポジウムの実行委員会が、6：4でよい方向に進むだろうというのが、私の感想です。

建物でございますが、私も美術館や博物館を、日本の一流の方々とともに、使う側の立場でつくってきました。その際、一番問題になったのが明かりでございます。この旧体育館の北側の明かり、南側の明かり取り、これらは素晴らしいです。それからトイレの入口を、女性、男性で分けている。

これもワンダフルですね。そしてこの建物を使うのは、学生であり、教職員であり、OGであるわけです。理事さんが使うわけではありません。その辺を真摯に考えていただければ、いずれよい方向へ向かいます。

東京周辺の大学で、T大学というのが二つあります。T大学の理事会側は圧倒的に強くて、教授が文句を言うとすぐにクビになります。私の建築史の仲間は、結局ドクターを取らないで、最後まで助教授で辞めさせられました。ですが、東京女子大学は皆さん素晴らしいメンバーだと思いますので、安心して研究会を盛り立てたらよいと思います。

たまたま今日の午前中は中野で、刑務所の正門を文化財指定にすることで、文化財審議委員会がございました。その時のメンバーで、日本民俗建築学会の理事長の宮崎勝弘先生がおられますので、建物全体の感想を一言、お願いしたいと思います。先生、お願いします。

日本民俗建築学会の理事長

宮崎 宮崎でございます。本来ならばこの席にはいないのですが、石井先生にたつて来るように言われまして、野次馬でまいりましたら、しゃべれということになって、困ったなあ。突然このような建物を拝見して感想を言うのは、大変に難しいですし、おこがましいわけですし、恐縮しております。鈴木先生もいろいろお話くださいましたので、私は何も言うことはないのですが、とにかくレーモンドの設計には、ライトの雰囲気が残っているなあ、ペレのデザインが残っているなあ、という意識とともに、この床を下げたというのも、レーモンドの考えがライトに似通っていて、建物を低く見せたいがゆえに敢えて下げたのではないかな、と思いながら拝見していました。こういう考えをもった建物というのは非常に少なく、建築史の上からも、世界的な建築様式の流れの中でも、この建物は残してしかるべき建物ではないかと思えます。皆さまの熱意に感謝しまして、御礼申し上げます。

石井(則孝) というわけですので、多分、理事長はガス抜きでこの会場を貸したのではなくて、恐らくこれからよく使ってもらおうという、高い理念でもって今日のシンポジウムの開催を許可したのだと思います。みんなでがんばっていきましょう。

石井 力強いお言葉、ありがとうございます。それで外部の方々だけでは、いったい学内の人たちはどう考えているのだろう、ということになりますので、指名することになって恐縮ですが、G先生、コメントをいただければと思います。

石井 ありがとうございます。それではもう一人本学の教員から、大角翠先生にコメントをいただければと思います。

大角／本学教授 現代文化学部で教えております大角と申します。こういう所で話すのはすごく苦手なのですが。この旧体育館がいろいろな意味で、歴史的にも、デザインのにも、卒業生やここにいる人たちの心の問題としても、とても重要だということが話されてきましたので、そのことについてはもう繰り返しません。

一言だけ付け加えますと、私は外国生活が長かったのですが、日本に戻って来てつくづく思うのは、古いものを大切にするという心が日本にはないなあ、と。昔はもっとあったのだと思うのですが。先ほど他の先生方もふれておられましたが、これまで日本ではどんどん新しいもの、モダンなもの、近代的なものと進んでいってしまって、建物だけでなく車とか、何でもそうですが、ちょっと古くなるとすぐに替えてしまって、それを直して使おうとか、どうやったら維持できるかとか、いろいろ工夫をして持ち続けるということをしなくて、新しいものを買ってしまった方が楽だし、そっちの方がお金がかからないということもありますが、そういう傾向が非常にある。外国といってもいろいろあると思いますが、ヨーロッパに何年も住んでいましたし、オセアニアにも住んでいたのですが、こんなになったものまで、よく使うなあと思うぐらい補修して使います。実は私は、子どもがその頃はまだ9歳くらいだったのですが、すごく悪い母親で何にも世話をしなかったら、靴が壊れてもシューグルーというもの（糊）を買って来て自分で補修して、いつまでも使っていました。ジーンズが破れると自分で布を買って来て、男の子ですけどちゃんと縫って使っていたという具合に、すごく大事にしていました。家でも何でも、修理の人がなかなか来てくれないような所だったので、みんな自分たちで補修して使っているという、そういう心がすごくあります。日本では、新しいものがよい、カッコよいものがよい、モダンなものがよい、テクノロジーは進んでいるものほどいいのだ、という傾向がある。私はケチというか、服でもセカンドハンドのものばかり

着ているような人間なので、やはりもう少し……。

しかも今日の今まで使っているような素晴らしい建物があるのに、なぜすぐに取り壊さなければいけないのかと。そういうところがすごくおかしいのではないかと、常々思っています。すみませんこんなことで。

石井 ありがとうございます。それからもう1名、ぜひコメントをいただきたい方がいらっしゃいます。今日、お見えになっている作家の近藤富枝さん。コメントをお願いできればと思います。よろしくお祈りします。

本学卒業生／作家

近藤 近藤富枝でございます。私は今日、ちょっと仕事がございます、遅れてまいりましたら、永井さんが私の芝居のことを話してくださったそうで。私もやはりここに来てまず思い出したのは、何十年前でございましょうねえ、私が20歳頃のことですから、65、6年前のお話なのです。ここでは何度芝居をやったかわからないのでございます。私は学校に来ているのか、芝居しに来ているのかかわからないくらい、お芝居ばかりやっていた者でございます。その中でも「修善寺物語」というのをやりました。その時に、私は大変に名演出家でございます、あちらの方（フロアに向かって右手の舞台）で第一場「夜叉王住処の場」をやしまして、こちらの方（フロアに向かって左手の舞台）では第二場、頼家とかつらのラブシーン「虎溪橋の場」というのをやまして、それから第三場、かつら討ち入りの場面の「夜叉王住処の場」を、あちらでやったのです。

私がおこがましくも、かつらの役をやしまして、夜叉王役は、後に福田恒存夫人とされました。当時は西本敦江とおっしゃった方で、当時、大変な名優でございました。それで瀬戸内寂聴さんが、かえでの夫の春彦をやってくださいました。かつらの妹が、かえででございまして、これは阿刀田高さんのお姉様で稔子さんという大変な美女がやってくれました。私は演出兼主役で大いばりで行りました。

一つエピソードを申しますと、ここの守衛さんが、こっちの舞台は使わないだろうということで、入口の鍵を閉めてしまったのです。それで第一場が終わって、第二場へ回ろうと、私と頼家役の田村さんという同級生がこちらの舞台へ回ったら、ここへ入れないのです。「大変だ」というので、寂聴さんが、あっち行ったりこっち行ったりして守衛さんを捜して、やっとここを開けて第二場が開いたというエピソードがございます。そういうわけで芝居をして本当に懐かしい建物でございます。

この体育館はいろいろな意味でよいところがあるのですが、もう一つだけ言わせていただきますと、確かあそこの隅だと思いましたが、鉄の棒が下がっていたのです。そこを消防士のようにスーッと伝ってロッカー室へ行くのが、私は大好きでございました。お転婆でしたから、いつでもスーッと下りてまいりました。つまりこれは昭和初期の女性たちに、そのような活発な動きというもの、レーモンドさんが考えてくださったのだろうと思ひまして、私はウーマンリブの走りだと思って喜んでおります。

つまらない思い出話をしましたが、ぜひこの体育館を残すように、皆さまで協力して運動していただくことをお願い申し上げます。

石井 ありがとうございます。本当に時間がなくなってきましたが、会場から、ぜひこの機会に一言おっしゃりたいという方がいらしたら、お願いします。

本学卒業生／元本学短期大学部教員

小黒 私は小黒和子と申します。卒業生で元短期大学部の教員でございました。短く申し上げます。たいへん抽象的な一般論になりますけれど、リベラルエデュケーションということをよく謳っていらっしゃるんですが、まさにこういう文化財に匹敵するものを残すために努力することを、大学として、教育の場として、社会に見せなければいけない、一つアピールしなければいけない場だと思います。これを簡単に「どうぞ、それでは壊してください」などと言っている。それは教育に携わる者として、実に根性のない話だという感じがいたします。こういう会をおもちになったことは、大変敬服する次第です。壊すことは簡単なので、むしろ残すことに努力していけば、社会に対して自然に伝わると思います。それが非常に大事だと思います。

私自身、行政関係のことで、ある地域の開発に反対して10何年か闘争したことがあります。その時の虚しさを考えますと、また虚しいのかということではありますが、ここは政治の場ではなくて、教育の場ですから、もっと話し合いができるはずだと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

本学卒業生／元本学助手・他大学教員

池上 1961年卒の池上恵子と申します。私は助手として本学に2年勤め、その後非常勤として十何年か勤めました。今申し上げたいのは、最初に「今日は争いたくない」とおっしゃった、その気持ちはよくわかるのですが、しかし「キャンパス整備計画について〔交渉中〕」というところのご出席がなくて、「なぜ壊さなければならないのか」ということの説明がなかったということが、非常に重大だと思っております。それが第一点です。つまり、もし本当にここを取り壊さないと本学の将来がないのであれば、堂々とこの場にいらして発言すればいいと思います。どなたでも結構です。ちょっと聞きましたら、学長はご入院とかいうこと（実行委員会注：実際にはすでに2日前に退院）ですが、代わる方もいるはずですね。あるいは理事長でも、どなたでもいい。やはり来て、説明していただきたかった。いらっしゃらないということは、そこに確たる根拠がないのではないかと、思わざるを得ません。

それから「なぜ旧体育館を解体しなければならないか」という3枚綴りのレジュメですが、「異議を申し立てる時期が遅すぎる」ということに関して、とにかく現職の先生方が立ち上がっていらっしゃるということを、卒業生として非常に感激し、応援したいと思います。それが第二点です。

(会場拍手)

それに付随しまして、「異議を申し立てる時期が遅すぎた」ということの裏には、私も大学の教員をずっとやっていたから、中にいるとなかなか言いにくいということもあります。正論であればあるほど言いにくい、ということはこの職場にもございます。ですからこうして立ち上がっていただいたことは、決して遅すぎるといったことはないと思います。もし遅すぎるとしたならば、耳を貸さなかった側がいたということでもあります。

それで、先ほどから名前が出ないので、出さない方がいいのかな、とは思いますが、もう皆さんご存知と思いますが、東女レーモンドの会（東京女子大学レーモンド建築 東寮・体育館を活かす会）という、卒業生有志の会がございます。私は本当にまともに活動をしていないメンバーです。よく活動していらっしゃる方は他にいらっしゃるのですが、その会のメンバーの端くれとして申し上げたいのですが、もうずいぶん前から異議——あるいは要望でしょうか——は申し述べてまいりました。しかし聞き入れてもらえなかったという事実を、ここにいらっしゃる皆さまには伝えておきたいと思います。

では、どうしたらいいのか、というところですが、期日も迫っていると聞きますが、やはり最後まで諦めたくない。どうするか、私自身も考えたいと思いますし、どうぞ現場の先生方、がんばっていただきたいと思います。

石井 ありがとうございます。はい、お願いいたします。

東京大学身体運動科学 元教員

跡見 私は東京女子大学の卒業生ではありませんで、先ほどの鳥越先生と横沢先生、この体育館を守りたいという方々の仲間で、東京大学で体育を教えていた者です。二つほどお話ししたいと思ったことがあります。

この体育館というのは、お話ししていても、マイクを使っても声が非常によく聞き取れますね。東大にも体育館はもちろんありますが、マイクを使ってお話しすると、ワンワン響いて全然聞き取れないのです。ですから構造上のことなのでしょう、音がこれほどきちんと聞き取れるというのはすごいことです。それが一つ。

それと体の専門家としては、皆さん、今椅子に座っていらっしゃいますが、椅子を取り除いて床に座りたいという気持ちがすごくします。からだというのは床に座ると非常に自由なのです。椅子というのは、こう座ることしかできませんが、床に座れば足も伸ばせるし、正座もできるし、いろいろな姿勢ができます。それが高齢化社会の、特に女性は平均寿命が男性よりも10年長いのですから、女性の教育としてきちんとからだの教育をしなければいけない。男性と女性とは骨盤の形から違うわけですから。そういうことを、東京女子大学を最初につくった人がちゃんと考えて、多分女性の教育としてからだの健康のことを教えなければいけないと考えられたと思うのです。ですからぜひこの旧体育館を残して、女性のからだの教育を考えるメッカにしていきたいと思います。先ほどの永井路子さんのお話の中にもありましたけれど、私もからだのことがすごく重要だと思っている仲間として、応援したいと思いますので、ぜひがんばってください。

本学卒業生／元本学助手

矢沢 14年前に33年勤めたここを退職した者です。その14年前に辞める時にも、牟礼キャンパスとの統合のためのキャンパス整備計画がありました。私たちが一所懸命植物の面倒をみたりしていたところが、建物を建てるためにかなりつぶされるということで、何とか少しでも守りたいということがありました。その際には、牟礼にいた学生を受け入れるために、建物をたくさん建てなければならぬということがあって、私たちも絶対反対したわけではなかったのです。けどどうやったら、できるだけ自然を残せるか、ということで、みんなでがんばったのです。

その時の状況と現在との違いは、当時の理事会は最初に、教職員にも学生にもきちんと説明をなさったのです。こういう計画で、こうするという説明があって、そこから出発して、それから全体集会というか、助手も含めて集会を開いて、その時にいろいろなことを細かに説明なさいました。ですから現在の理事長と理事会は、かつてに比べて悪くなっていると感じます。みんなの意見を受け付けない、教授会の意見も受け付けない、そして学長も理事会のいう通りになってしまっているという気がします。

その頃の学長は、そんなにしっかりした学長でもなかったのですけれど、それでも理事会に対して自分の考えをおっしゃいましたし、助手である私の意見もずいぶん聞いてくださいます。他のいろいろな意見も聞いて、それを理事会に反映させる、ということをやりました。理事長や理事長補佐の職員も、最後の建物を建築する場所を決める段階でも、私のような立場の者の意見も聞いて、それでどこの場所にするという、そういう決め方をしてくださいました。そして学内のみんなが何とかよい形で、建物も建てるけれど、庭も残したいという思いで一所懸命にみんなで当たりました。そういう学内の動きを、理事会ははねつけるようなことはしなかったという、その時の経験に照らしてみると今は……。学長は「本当は残したいのだけれど」とおっしゃいました。ご自身の意見をもっとおっしゃってほしいと思います。

石井 ありがとうございます。では、次の方。

本学在学生／現代文化学部地域文化学科四年

H 地域文化学科四年のHと申します。この3月で東京女子大学を卒業します。どんどん古い建物がなくなってしまうのですが、卒業してから学校を訪れた時に、私が過ごしてきた建物がなくなってしまうのは、とても悲しいと思います。今日のお話を聞いて自分で考えたことは、2年ほど前になくなってしまった昔の寮、5号館の時もそうだったのですが、なくなってしまうことが決まってから、価値のある建物だということがわかるのはとても悲しいということです。学生にも東女の歴史や、価値ある建物があることを教える機会があればいいと思います。この旧体育館もなくなってしまうと聞いたので、なくならないような措置がないかどうか、検討してもらいたいと思います。ありがとうございました。

石井 ありがとうございました。現役の学生からの意見を聞くことができ、非常に嬉しく思います。他には、よろしいでしょうか。なかなか詰めた議論をするのは難しいのですが、いろいろな意見を聞くことができたと思っています。本当はもっといろいろな話をしたいと思いますが、このあたりで次に移りたいと思います。

最初に森先生の方からご紹介がありましたが、今日のシンポジウムのまとめとして、アピールを採択したいと思います。

その前に、これはとても重要なことだと思いますので、杉並区長から最近、大学に出された要望書をご紹介しておきたいと思います。読み上げます。

「東京女子大学旧体育館の保存に関する要望書」

東京女子大学におかれましては、日頃から杉並区の区政に対してご理解とご協力を賜り、御礼を申し上げます。

さて、貴大学内の旧体育館が近いうちに取り壊されるとお聞きしました。旧体育館は貴大学の学生はもとより、多くの建築家や地域住民にも知られた歴史的に貴重な建築物でございます。その旧体育館の取り壊しを知った区民から、当区に対しても、旧体育館の保存に関するご要望が届いております。

区といたしましても、区民に親しまれ、区内に存在する歴史的に貴重な旧体育館がなくなることは、まことに残念であります。東京女子大学におかれましては、様々なご事情はあるかと存じますが、旧体育館の建物保存に特段の御配慮をお願い申し上げます。

今後とも、杉並区の町づくりにご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成21年3月5日

東京女子大学 原田明夫 理事長様
湊 晶子 学長様

杉並区長 山田宏
(会場拍手)

この文面はパネル展示してありますので、後でご覧いただければと思います。

それでは本日のプログラムの最後ですが、「本日のシンポジウムのアピール」をまずご紹介いただきたいと思います。森先生から、お願いいたします。

10. 総括と展望

森 今、一枚のアピールの文面が渡っていると思います。その前に一つだけ、先ほどの議論の補足と言いますか、この会の初めに私は、「解体絶対反対」という一方的な議論ではなくて、双方の議論を照らし合わせて慎重に検討するのだ、そういう趣旨でやっているのだと申しました。ところが実際に蓋を開けてみれば、解体に対して疑問を投げかけ、保存を訴える声がどうしても多くなりました。これはいろいろな理由があるかと思いますが、一つには本日のプログラムで「キャンパス整備計画について」という3番目の項目がありまして、そこで「交渉中」ということになっていて、結局最後まで交渉中で終わりました。これからも交渉するかと思うのですが、キャンパス整備について担当しておられる、責任ある立場の方に出てきていただきたいと強く願い、そのように申し入れてまいりました。

13名の理事の方々には、全員に手紙を書きまして、返信用の出欠の葉書も入れて、速達でお送りしました。が、お返事はまだ2人からしかいただけていません。お2人ともご欠席のお返事でしたが、ご返事いただけるだけでも、ありがたいと思います。それからキャンパス整備委員会というものがございまして、学内の教員からも8名参加しています。その委員の教員にも8名全員に返信葉書付きの手紙をお送りしまして、こちら2名の方からしか返事はありませんでした。2人ともご欠席ということですので、我々は努力はしました。両論の問題点なり、特質なり、そうしたことを考える場として、この場を設定し続けてきました。ですからその点に関しては、なにとぞ一方的だと思われたり、指摘されたりすることがないように、お願いいたします。

最後に今回の議論全体を総括するようなことを、僭越ながら私の方から提案したいと思います。この提案は私たちが事前に準備したのですが、どなたにもご理解いただけるような文面になっています。先ほど石井（則孝）先生の方から、これは6：4で勝ちかなという嬉しいお話もありましたが、そうはなかなかいかないという現実があります。ですが、この程度は我々の総意として強く訴えることが許されるのではないかと、そういう程度のものにしてあります。文面を読み上げたいと思います。

「3. 14旧体シンポジウム・アピール文（案）」

① 本日の公開シンポジウムに参加した私たちは、討議を終えたいま、旧体育館解体問題はこれで決着したどころか、いっそう具体的かつ多角的に議論を深めてゆく必要があると、あらためて認識できた。私たちは、東京女子大学の来し方行く末に関わるこの重大問題を、今後も粘り強く考え続け、真剣に論じ合っていきたい。

② 旧体育館解体の是非について議論を続けるには、なんといっても時間が必要である。ところが大学の従来のキャンパス整備計画では、五月に入るや、解体作業が始まってしまう。この貴重な建物は、いったん壊されてしまえば、永久に元には戻らない。それゆえ私たちは、旧体育館の解体計

画を、新体育館のそれとは切り離して、いったん凍結するよう、キャンパス整備委員会、ひいては理事会に、強く訴えたい。

③ 旧体育館の維持可能性を具体的に検討するには、耐震調査をより実証的に行う必要がある。大学は以前、清水建設に旧体育館等の耐震診断を依頼し、調査報告書を所有している。教職員がそのデータ開示を求めたにもかかわらず、理事長の判断で拒否されたままである。その判断の理由は説明されていない。公教育機関の公共性にかんがみて当然公開すべきと考えられるこの耐震調査報告書を、すみやかに開示するよう、理事長に要求したい。

④ これまで教職員は、旧体育館解体とオープンスペース化の計画についての説明会の開催を、理事会側に幾度となく求めてきた。言論の府に属する者として当然の要求であろう。ところが遺憾ながら、その要求はことごとく却下されてきた。しかしこれだけの重大問題を、理事会（と三菱地所設計）のみの判断に委ねるべきではない。全学的議論を尽くしたうえでの合意形成が不可欠であり、それなくして旧体育館解体を強行すれば、大学の将来に禍根を残すことは必至である。理事長もつねづね「対話」重視を唱えておられる。専門家によるセカンドオピニオンを徴することの重要性を知った私たちは、旧体育館をなぜ解体しなければならないか、に関する適性な説明会の開催を、シンポジウム参加者の総意として、理事各位にあらためて要求する。高等教育機関の運営に責任を持つ言論人としての誠実な回答を、切に望む。

以上です。（会場拍手）

石井 すでに拍手が起こってしまいましたが、このアピールにご賛同いただける方は、もう一度拍手をお願いいたします。（会場拍手）

◆ 閉会

それでは今日のシンポジウムを終わりにしたいと思います。こういう集まりを開くところまで来たのは、やはり旧体育館という建物がいかに魅力があるか、ということの証左だと思っています。今日は外部の方もお招きしてシンポジウムをもったわけですが、それは私たち教職員の考えていることが、他の外部の人からはどのように見えるのかを確かめたかった、というのも目的の一つでした。今日の集まりで、たくさんの貴重なご意見を伺うことができたと思います。これでいろいろなつながりもできたと思いますので、これから皆さんのご協力を得て、先に進んでいきたいと思えます。本学の教職員としては「理屈の通らないことはそのままにしない」という姿勢で、時間も迫ってきていますけれど、この問題に取り組んでいきたいと思えます。

それでは皆さま、本日はご参加、ありがとうございました。これで閉会したいと思います。

2009年3月14日

なぜ旧体育館を解体しなければならないか
—理事会・キャンパス整備計画委員会側の説明とそれに対する疑問—

数理学科 石井信夫

1. キャンパスの安全性に関する問題

(1) 旧体育館の耐震性

○ 現在の旧体育館は、老朽化もあり、耐震基準を満たしていない。
→ 耐震補強は必要であろう。財政的に見て改修が可能か否かを判断するために必要な費用見積もりが示されていないので、示してほしい。

○ 補修費用は新築以上のコストになるであろう（2008年6月の第11回キャンパス整備計画委員会（以下、計画委員会と略）における三菱地所設計の発言趣旨）。

→ 旧体育館と同じものを新築するという考えはない。問題にしているのは費用の金額自体である。

(2) オープンスペースの必要性

○ 旧体育館と新研究棟の間が狭く、大型緊急車両が通れない。

→ 立ち木を伐採すれば通過できるのは明らかだが、そもそもなぜ迂回せずにここを通過しなければならないのか不明。

第11回計画委員会記録（同上）によれば、三菱地所設計の担当者は「研究棟と旧体育館との間の幅が狭く、緊急車両の動線は確保できない」と述べている。これは事実と反するし、ここを通る必要性の説明になっておらず、専門家の発言として問題である。

○ 災害時に学生・教職員が避難する場所としてオープンスペースが必要。旧体育館があると、多数の避難者がいるところを緊急車両が通ることになるので、安全性が確保できない。

→ 現在の新体育館の跡地で十分ではないのか。また、すぐ横に高層の建物があるようなスペースが安全な避難場所となるのかも疑問である。

○ 災害時にグラウンドに抜けようとしても、学生ホール・図書館・9号館の間の通路が狭く、安全性を確保できないので、避難場所となるオープンスペースが必要である。

→ 旧体育館の有無により安全性にどの程度の違いが生ずるのか不明である。

○ 現在はキャンパス内に学生の憩いの場所がない。前庭は道路から見えるので不適當。

→ スペースは現在の新体育館跡地で十分ではないのか。また、旧体育館は、そのような機能を果たす場として活用できるのではないか。

2. 財政上の問題

○ 登録有形文化財7棟の改修・維持は、大学が責任を持って行う義務があるが、今後莫大な費用がかかる可能性がある。たとえば、6号館（東校舎）の改修には、当初の見積もり（1億円）を大きく上回って2億円を要した。本館、講堂など、他の建物でも同様の事態が起きる可能性がある。このうえ旧体育館の改修・維持費まで負担するのは財政的に困難。

→ 旧体育館の改修・維持にどのくらいの費用が見込まれるか、具体的数字を示してほしい。学長でさえ教えてもらえないのは問題ではないか。場合によっては、募金などで対応することも考えられる。

現在のキャンパス整備は、80周年記念事業と異なり、無借金で進められている。大学の財政が危機的状況にあるわけではない。トイレ改修、今年度計画になかった前庭改修（2号基本金の対象外）などの実施状況を見ると、財政的に余裕がないとは考えにくい。近年行われている個々の

工事の費用についても、旧体育館の改修・維持費用見積もりとともに示してほしい。

なお私たちは、専門家に依頼して独自に改修費用の見積もりを行おうとしたが、清水建設による耐震診断書の閲覧は理事長判断によって認められず、その理由も不明である。学内関係者の要望に対し、閲覧拒否の理由さえ示されないのは問題ではないか。

3. 手続き上の問題

○ アンケートや説明会を通じ、全学的な意見聴取を行っている。

→ アンケートは、**2005年5月**、基本計画が明らかにされていない段階で行われている。旧体育館の解体計画が明らかになったのは**2006年3月**の説明会が初めてである。また、説明会が行われた当時、教員は**2009年度**からの学部再編の検討に時間とエネルギーを費やさざるをえず、キャンパス整備計画については十分な注意を払うことができなかった。

また、**2006年1月**の第**1**回計画委員会記録には、**(3)** 今後の進め方として「本委員会で結論を出す前に、学内外関係者にコミットすることがないように充分注意してほしい」という記述がある。これは物事の進め方としては逆ではないか。

○ キャンパス整備計画委員会では、**8**名の教授会メンバーも加わるなど、全学的な態勢で討議が行われており、教職員の意見も十分反映されている。

→ 委員会のメンバーは職位によって決められており、さまざまな立場からの意見が得られるようには選ばれていない。たとえば、もっとも大きな影響を受ける健康・運動科学の教員は入っていない。また、計画委員会での検討内容に関する事前の意見聴取、事後の詳しい報告は行われていない。このことが現在の事態を招いている原因の一つである。

○ 旧体育館の解体は機関決定なので変更できない。

→ 同じように機関決定された**3**号館の解体計画は、その後、教室不足などが明らかになったとの理由で中止となっている。機関決定は変えられないものではない。

○ 意義を申し立てる時期が遅すぎる。

→ 上述のとおり、アンケートや説明会が行われた当時、多くの教員はキャンパス整備計画について十分な注意が払えない状況があった。しかし、教授会などの場における個別の疑問表明は、解体計画が明らかになった時点から再三にわたって行われていた。

今回のシンポジウム開催時期が解体直前になったのは、理事会側の真摯な説明を待っていたからである。学内の問題は学内で解決したいという気持ちもあった。

○ ハード面の決定権は理事会にある。

→ 事業の最終決定を理事会が担うべきことは「私学法」にも定められているとおりが、本件は教学の環境そのものに関わる問題であり、意見表明と決定について、教職員に一定の権利があることは当然である。理事会には権限に伴う説明責任がある。

4. その他

○ 大学キャンパスを**3**つのゾーンに区分して整備するという全体構想が崩れる（旧体育館はアドバンスト・リサーチ・ゾーンに位置する）。

→ このことが大きな理由として推測されるが、固守しなければならない理由が不明。

○ 解体を前提に建築許可申請をしているので、旧体育館が残っていると、新棟は仮使用ということになる。

→ 変更届を出せば済む問題である。

○ 旧体育館と新棟の間の距離が狭いので、延焼を防ぐために窓ガラスを金網入りにしなければならないことが法律に定められている。

→ 距離は十分あると思われるが、仮に間隔が取れないとしても、窓ガラスを替えれば済む問題であるし、旧体育館を解体しなければならない理由にはなりえない。

○ 2008年6月の計画委員会第11回記録には、「当方の経験では、保存問題はその建物が無くなるまで続き、無くなると止まる」という発言がある。

→ このような発言は、当事者として問題ではないか。

以上

3.14 旧体シンポジウム・アピール

① 今回の公開シンポジウムに参加した私たちは、討議を終えたいま、旧体育館解体問題はこれで決着したどころか、いっそう具体的かつ多角的に議論を深めてゆく必要があると、あらためて認識できた。私たちは、東京女子大学の来し方行く末に関わるこの重大問題を、今後もねばり強く考え続け、真剣に論じ合っていきたい。

② 旧体育館解体の是非について議論を続けるには、なんととっても時間が必要である。ところが大学の従来のキャンパス整備計画では、五月に入るや、解体作業が始まってしまう。この貴重な建物は、いったん壊されてしまえば、永久に元には戻らない。それゆえ私たちは、旧体育館の解体計画を、新体育館のそれとは切り離して、いったん凍結するよう、キャンパス整備計画委員会、ひいては理事会に、強く訴えたい。

③ 旧体育館の維持可能性を具体的に検討するには、耐震調査をより実証的に行なう必要がある。大学は以前、清水建設に旧体育館等の耐震診断を依頼し、調査報告書を所有している。教職員がそのデータ開示を求めたにもかかわらず、理事長の判断で拒否されたままである。その判断の理由は説明されていない。公教育機関の一翼をになう私立大学の公共性にかんがみて当然公開すべきと考えられるこの耐震調査報告書を、すみやかに開示するよう、理事長に要求したい。

④ これまで教職員は、旧体育館解体とオープンスペース化の計画についての説明会の開催を、理事会側に幾度となく求めてきた。議論し合うことの意味を学ぶ場に身を置く者として当然の要求であろう。ところが、遺憾ながら、その要求はことごとく却下されてきた。しかしこれだけの重大問題を、理事会のみの判断に委ねるべきではない。全学的議論を尽くしたうえでの合意形成が不可欠であり、それなくして旧体育館解体を強行すれば、大学の将来に禍根を残すことは必至である。理事長もつねづね「対話」重視を唱えておられる。専門家によるセカンドオピニオンを徴することの重要性を知った私たちは、旧体育館をなぜ解体しなければならないか、に関する適正な説明会の開催を、シンポジウム参加者の総意として、理事各位にあらためて要求する。高等教育機関の運営に責任をもつ言論人としての誠実な回答を、切に望む。

学内のメールでの意見交換より ——教員による旧体育館活用方法の提案——

【この2月から3月にかけて、旧体育館シンポジウムの企画をきっかけとして、問題意識を共有する本学教員どうしの電子メールでの意見交換が、活発になされるようになりました。そのなかでも建設的な意見を表明した三名（シンポジウム主催者以外）の教員のメールを、本人の許諾を得て、ここに掲載します。】

○2月16日付で、旧体解体再考要望書賛同者アドレスに流れた、A氏のメール

〔前略〕

(1) 旧体育館問題は本学の将来を決める教育問題でもある：

私が本件を問題視し始めたのは、この問題が教育問題であることに気づいたからです。もっと言えば、建学の精神のひとつであるリベラル・アーツ教育を揺らがす問題でもあるように思えるからです。単なるハードの問題ではないのです。また、今回その点についての議論の展開が少ないように思えますので、教育との関係、そしてそれがハードと密接に関係することを強調してもよいのではないのでしょうか。少し説明を要します。

この東京女子大学というところは、このような新旧学生や教職員の思いがしみこんだ建造物を大切に維持し続ける教育機関であることを示すことの重要性です。同窓生、在學生は勿論のこと、実はこれから入ってくる学生、十年先を見据えるならば、現在小学生のための旧体育館です。毎年、入ってくる新入生に対して、我々教職員そして在學生は、いかにこの建物を大切にしたいか、しているか、を伝えます。そのこと自体が教育であると私が考えるからです。

ものを大切にする。そこに集まる人の思いを大切にする。維持する努力をする。次々とつなげる重要性を認識する。それらは全て教育です。長くなるので書きませんが、リベラル・アーツの発想にも重なるのです。大学を選ぶ学生も、そのような心意気のある大学を志望します。新入生は入学すると同時に、旧体育館とのつながり（絆）をもつこととなります。東京女子大学は過去、現在よりも未来をとる、将来のために旧体育館を解体するという考え方があろうです。しかし、正にその将来のために、主役である学生のために、この旧体育館を維持すべきと考えます。

(2) 旧体育館は大学の顔であり、教職員と学生の心のよりどころ：

学生、教職員が同じ思いを抱ける、心をひとつにできる場所。そこを通過して、ちらっと見たその瞬間に、その現象が起こる。みんなが同じことを思うからです。言わば心のよりどころですね。その威力は大変なものです。組織が一番力を発揮するときは、規則でも制度でもなく、みんなの思いが一緒になるときです。その潜在力をもっていることとなります。そのような組織的効果も理事会に理解してほしいと思います。

文理学部 教員 A

○2月21日付けで、旧体問題再考メーリングリストに流れた、B氏のメール

〔前略〕

D先生のメールでも言及されていますが、旧体育館について素敵だなと思うのは、運動・演技をしている姿を建物の内外から見るができるよう設計されている点です。「いつも誰かが見守ってくれるわけではない。でも、いつ誰に見られても大丈夫と言える姿勢でいよう。」というメッセージが感じられます。ことばではなく毎日利用される建物の形にこういうメッセージを残す人がいらっしやったことは素晴らしいと思います。

このメッセージは、大学教育のあり方にもつながると思います。私は学部生のときに scientific literacy ということばと出会いました。「自分の専門以外の分野について専門家と同じ知識・技能を持つ必要はない。でも、その分野の専門家が何をしようとしているのかを理解し、その妥当性を判断する能力をひとりひとりが持っていなければ、そして自分の専門については相手の理性を信頼して説明できるようでなければ、社会全体の危機を回避していくことはできない」というようなことでした。東京女子大学でも、このような能力が育まれ、教室の外でも発揮されるようにしたいと思っています。上記のメッセージには、このようなことにつながるものを感じますが、それを活かしていくには、学生に語り伝えるだけでなく、私たちの言動にその姿勢が現れている必要があります。（「教授会・理事会を始めとして大学の方針を決める会議は、旧体育館で体育座りして進めたら、組織に必要な透明性も意識され、途中でストレッチもできてよいかも」と思ったのですが、「腰が冷える」という問題点を指摘され断念しました。）

もちろん考慮にいれるべき要因は他にたくさんあります。次の3点は既に認識が共有されていると思います。

- (1) 限られた資産・時間・空間の中では優先順序が必要であり、価値あるものを切り捨てなければならないこともある。
- (2) 「総合的にみて最善の方針が選ばれた」という認識が必要。
- (3) 最も優先されるべきことに学生の安全確保が入る。

安全の確保は安心につながるものですが、多くの方が述べられた「納得したい」ということばは「総合的にみて最善の決断がされている」という安心感が持てないこと示しています。この状況が工事開始後に出て来た背景には、

- (A) 3号館解体変更に見られる計画のぶれ
- (B) 既に完成した建築物のデザイン
- (C) 3号館の耐震強度の説明を聞いたほぼ全員が誤解したらしく「学生の安全のため」という共通認識と思ったものが心許なくなり、その他に目指す理念・解決される問題が見えない（中略）などがあります。

今回皆様のご意見をうかがう機会に恵まれ、とても良かったと思います。私自身はどのような形で思いをことばにすればよいか考えあぐねておりましたが、やっと少しまとまりました。安全を含め安心して仕事・勉強のできるキャンパスを作っていきたいと思っております。

現代文化学部 教員 B

○2月26日付けで、旧体問題再考メーリングリストに流れた、C氏のメール

これまで、旧体保存（含シンポジウム）について賛否両論、いろいろな立場の方のご意見やご提案に接し、あれこれ一つと考えることができました。ようやく自分の中でまとまりましたので、私見を述べさせていただきます。

端的に言えば、この問題は、今後の女子大の方向性を示す問題である、と思います。教職員・学生・卒業生、これほど多くの人たちが、旧体育館解体に不安をかきたてられているのは、あの建物が85年にわたって紡いできた過去の記憶の場が絶たれ、未来への展望を失うから、ではないでしょうか。

例えば、数日前のE先生のメールを拝読して、思わず、ん十年前のいろいろな光景や顔を思い出しました。旧キャフェ！ 何だか薄暗くて、ほどよく(?)汚くて、本当によかったですよねえ。このごろ、本館の地下に入れるようになったので、ますますいろいろな記憶が甦るようになりました。それは、決してノスタルジアではなく、現在の自分の根っことして、今ここに在る安心感としっかりつながっています。

一方、旧体については、私は、学部時代の思い出がE先生以上にありません。(そもそも、体育にあまり興味がなかったのです。体育の先生、ごめんなさい。) そんなこともあり、私も、レイモンドのものとぼんやり知りつつ、大学にはお金がない、すでにそういう計画になっている、という2点から、旧体は諦めなくてはいけないものと信じこみかけ、卒業生たちのレイモンドの会ほかの動きも「諦めの悪いこと」と片づけてきていました。

それが、だんだん変わってきて、つい最近、残して有効活用することは、東京女子大にとって、とても大切だということをはっきり認識するようになりました。レイモンドのものである、というだけではなく、この建物の歴史と保存を考えることにまつわる東京女子大にとっての付加価値が、はかりしれないほど大きいと思うからです。先日、A先生が書いていらしたように、私も、まさにこれは、「教育問題」だと思いますし、B先生がまとめていらしたように、学内外の関係者に蔓延ってきていて、私がこのところ肌でひしひしと感じていた、女子大の現在のあり方と行く末への「不安」を解消し、危うくなりつつある女子大の拠ってたところを皆で確認し共有することにつながりそうな希望を感じるからです。そして、この問題が、今後、東京女子大が生き延びていく、重要なカギを握っているとも確信するようになりました。

ちょっと長くなりますが、私がこう思うようになったいきさつと理由を紹介させていただきます。

1) 2007年7月 イギリスからの来客の話を聞いて

講演に訪れた、イギリス在住の絵本作家で、建築(とくに欧米の建築の日本への影響)にも詳しい人を案内したところ、たいへんに喜ばれました。私が、旧体育館の前で「これは価値が低いらしく、壊される予定」と言ったところ、彼は「もったいないなあ」とため息をつ

きながら、この建物でさえ、いかにレイモンド的かということ具体的にあちこち指摘しながら教えてくれました。さらに、この建物を通して、フランク・ロイド・ライト（米国）→アントニン・レイモンド（チェコ）：欧米とマヤ文明の意匠と日本の伝統的建物の融合→その後の日本の建築家たち、というような、初期の国際交流と影響関係がわかることも、教えてもらいました。

2) 2008年2月学生研究奨励費の研究発表内容、および、4月の始業講演時の優秀賞発表での感動。

E先生ほかを書いていらした Exile のPVの画像が合わせて流された時です。私も涙が出ました。（今度のシンポジウムでも観たい！）

3) 2005年～2008年各前期 毎年の学生たちのレポート

担当している学科科目の授業（80名前後が履修）で、ナショナルトラスト運動や環境破壊に関して、先進国であるイギリスの実態を学んだ後のレポートや感想として、毎年、必ず、しかも、たいへん多くの学生達から、古い建物を壊すことへの抵抗・嘆きが寄せられます。「なぜ、日本では、こんなに古いものを平気でどんどん壊すのか」「もうこれ以上、一つとして壊して欲しくない！」という叫びに近い声すら聞こえることがあります。他のテーマに対する反応よりもずっと過敏で、強い関心を示す反応だと感じさせられるものが多いことから、私たち（親？やそれ以上の世代）より、現在の日本の若い人たちの方が、こうした問題に対する危機感をはるかに高いという実感を、ここ数年強めてきました。彼女たちの発言の中には、なぜ、東京女子大まで、古いものを大切にしないのか、という疑問や悲しみが垣間見られます。

4) 学内にパブ的な機能をもつ場を作るのに旧体がふさわしい。

上記と同じ授業で、イギリスでコミュニティの大きな要を担ってきたパブのようなものを女子大内に作るのとすると？という問いを出すと、決まって、新入生たちの1割以上が、毎年、旧体育館をあげることに気がつきました。レトロで味がある、と言います。（もちろん、お酒なしですが）コーヒーやスイーツがいつもあって、ぷらりと立ち寄ると、学年や学科も違う学生同士や、先生たちと、気軽に話せてくつろげる場があるとすごく嬉しい、という希望も聞きます。図書館1Fのリフレッシュルームの人気を見れば、その需要の高さがよくわかります。皆が行き来する通り道という旧体のロケーションも、これにぴったりだと思えます。（イギリスの大学には、よく教職員が誰でもお茶を飲みに行けるコモンルームがあり、ここでいろいろな人と話しができるのが私はとても好きです。こういう役目も兼ねるところがあるとよいな、と私も思います。）

5) 2005年11月～2007年11月 競技ダンスの演技

2期にわたって、ゼミ生が二人、競技ダンス部員だったため、ヴェラ祭の演技や練習風景を時おり観ては、1段低くなっている床や、階段上から見てみたときの、ふしぎな構造を楽しんできました。人の動きをととても美しく見せる設計になっているのです。（Exile はさすが目が高いと思いました。）

6) 2008年7月 理事長からの意見聴取時のいろいろな意見

私は、当日、出席できませんでしたが、後で、テーブル起こしされたものを拝見し、いろいろな捉え方を知って、大いに啓発されました。

7) 2008年12月～2009年1月 同窓生達の切ない思いと動きを直に知ったこと&その理由

レイモンドの会ではない人たちから、母校の将来に、大きな不安を覚えている生の声をいくつか聞きました。また、旧体解体を含むキャンパス整備計画が「ただひたすら母校の経済

的困窮」と「今の学生には新しい校舎でないと見捨てられる」という不正確な誘導(?)と刷り込みに、未だに基づいているらしいと思えたことで疑問が増しました。

8) 2009年2月 新棟のセンスのないデザインと環境破壊への危惧

林からの緑風や光をさえぎり、専門家が褒めていた善福寺公園から続く生態系にも悪影響をあたえそうな高さとロケーション、さらに、他の棟と(新しめの建物やリフォームした図書館の1Fとさえ)調和する工夫がなされておらず・・・せっかく作っていただいたのに、本当にかっかりしました。今はまだ、この建物の脇に、旧体育館があるので、あの空間も、かろうじて東京女子大らしさを留めていますが、旧体までなくなったら、ただの新しい不調和な建物群の一画になってしまいます。図書館前で、人の行き来も多い一画なので、大学のキャンパスの印象はかえって悪くなるのではないかと、私は心配です。

体育館に新しい機能を加えて活用する方法はいく通りもあると思います。例えば、先日、D先生が書いていらしたような、中で身体を動かしている人たちの動きなどが見えるテラスカフェの案、とても素敵だと思います。学生と話していると、2Fの暖炉がある部屋は古めかしさをたっぷり活かして女子大縁のアーカイブズ(歴代学長や女子大を発展させてきた人たちの肖像画、活躍する卒業生や古い授業風景やキャンパスの写真など)類を展示したくつろぎの空間に、あの独特の円すい状の鉢があるバルコニーは、夏、冷たい飲み物(ビールは諦めるとしても)を飲むのにとっても気持ち良い空間になりそう・・・と夢も広がってきます。

古い建物をただ博物館的に保存するのではなく、現代的に活かす新たな「設計」をするのは、金銭、労力両面で、解体よりもかえって大変かもしれません。でも、これだけ古い建物が破壊され、限られた資源のなかで生きている私たち(とくに日本人)には、賢く生き続けるための叡知とセンスが、今、問われているように思います。そういうことの必要性を、新しい建物や街の中で生まれ育った若い世代の人たちは、直感で感じ取っているような気がします。

新しい建物でピカピカの新設大学やお金持ちの大学は、他に山ほどありますし、そういうところと、本学がハード面で競合したところで無意味なのは明らかです。でも、東京女子大には、ここにしかない由緒ある建物と緑豊かな美しいキャンパスがあり、それらが和して、女子大の90年の歴史と文化を具現しているのだと思います。すでに、二つの寮はなく、周囲とそぐわない新棟が建ってしまったのは残念ですが、まだ、レイモンドの8棟ほかがあります。とくに、旧体育館は、女子大に現存する最古の建物、しかも、「社交館」として、初期から続く建学の精神を色濃く担ってきた建物です。これらを建ててくれたアメリカの女性たちの尽力やレイモンドと日本の国際交流を示す「生き証人」でもあります。体育館としてだけではなく、さらにもっと上手に活用する方法が見つけられれば、それこそ、歴史と文化交流の現場にいるという意識を学生たちに実感させ、教員と学生がこの大学で学び合うことの意味を無言にして伝える、またとない場になりうるのではないのでしょうか。新しい時代の東京女子大にふさわしい、新たな「対話」と「社交の場」として、象徴性も実際的な価値も合わせ持った、女子大の存在意義、古くて新しいヴィジョンを具現化し、過去も現在も含んだ記憶を語り継いでいく場が生まれるのではないのでしょうか。

例えば、旧体育館の内側では、相変わらずだれかが踊ったり体操をしたりし、1Fのテラスでお茶をのみ、2Fの女子大の歴史を刻む写真や品に囲まれた暖炉前のソファで語り合う学生や教職員・卒業生の姿です。こういうイメージは、現在も過去も、女子大で学び働いている(いた)者として、数十年経ってもかわらない女子大の姿として想像しやすく、それは大きな安心感へとつながります。単なるノスタルジアとは異質です。それに対し、今回の新棟も含めて、新しく建てられた建物や、旧体育館もなくなったオープンスペースが、やがて古びて手を入れる必要が生じる数十年後、私には、それらを残して継承すべき意味は見出せ

ず、キャンパスに対して安定した美しいイメージも描けません。目に浮かぶのは、ただ、どこにでもある古くなったコンクリート建築物と、高い建物にうもれた不毛なスペースのみです。なぜなら、それらは、東京女子大らしさや建学の理念をまったく反映させておらず、女子大にとって、何の付加価値もないものだからです。こういう建物が古びた時には、また壊して新しく建てることしか、考えられなくなるでしょう。こう考えると、大学の歴史や建物を使ってきた人たちの記憶につながらない、古くさいゼネコン的なキャンパス設計では、とんでもなくもったいない！と思います。東京女子大学のように、せつかく他に類のない「売り」になるものがあるのに。

少し前に、F 先生が、「対話」こそが大切、と書いていらっしやいました。まったくそのとおりだと思います。今回、こうして、旧体育館をめぐるいろいろな意見が交わされるようになったこと自体が、まず、対話の一步です。ただ保存か否か、という旧態然とした二者択一の議論から脱出して、東京女子大のキャンパスに旧体育館を残す意味と現代的活用法について、知恵を出し合うことが、現在、もっとも大切なことではないかと感じます。そのためにも、さらに多くの「対話」が必要でしょうし、その中から、想像力と創造力を駆使して、旧体育館を女子大の過去から未来へとつなぐ「ヴィジョン」と「構想」が出てくるとよいなあとと思います。心ある理事たちや湊学長にも、もっと別の夢を描いていただけるような再生のプランを出せたら最高です。

私は、さらなる対話への一步として、シンポジウムに期待しています。いろいろな考え方を、湊学長や、理事の方々や、大勢の教職員・卒業生・学生たちとともに、穏やかに豊かに考える機会になりますように、進めてくださっている方たちをお願いします。

現代文化学部 教員 C

【以下の文章は、シンポジウムに先立ち、3月8日に、B氏、A氏、C氏のあいだで交わされた旧体育館の活用方法に関するメールのやりとり三通です。旧体育館問題メーリングリストには流されませんでした。B氏とA氏は事情があってシンポジウムは欠席でしたし、重要な提言を含んでいますので、三人の了解を得て、本記録集に掲載することにしました。】

○A氏→C氏へ

(前略) 実は、私も新たなアプローチとして「本学の教育理念」と旧体育館問題の関係を理事会に認識していただく方法があるのではと考えていました。実際、そう思うからです。おはずかしいですが、それを書いてみます。

(1) 本学の教育理念 (リベラル・アーツ教育) :

本学の教育理念の根幹をなすリベラル・アーツ教育と本件との関わりを示すことを先生方にお考えいただければと思っております。下記は一例ですが。

リベラル・アーツ教育はいろいろな意味を含んでおりますが、その重要なひとつに、「偏見なく、さまざまな視点でものごとを理解し受け入れる公平な心を養う」ということが挙げられると思っております。

例えば、本館は文化財に指定されていますので、それも重要ですから継続的に保護することになります。しかし、旧体育館は別の意味で大切ですから、こちら末永く保存するとい

うふうに考えるのが、公平な視点と言えましょう。

現在のHPに出っていますが、建学の精神より、「本学のリベラル・アーツ教育は、単にいろいろな知識を修得するだけの教育ではなく、何が真理かを自由に考え、既成概念から解放され、困難を克服できる人間力を備えた学生を育てることを目指しています。」

例えば文化財というのが既成概念とすれば、その領域から脱することになります。しかし、旧体育館を残してほしいという純真な気持ちの中には、「真理」があると思います。今回のことは、正に教育現場の真理の追究でもあるように思えてくるのです。おそらく皆さん方は、そのことを何となく感じているので、単なるノスタルジア的感觉ではなく、学生を教育する立場にある人間として、このままではいけないと思っておられるのではないのでしょうか。

(2) 本学の教育理念（学生の声）：

東京女子大学の教職員は日頃、何のために、誰のために努力しているかと問われれば、その答えは迷わず「学生」です。彼女たちが主役で、その主役を育て、支援するのが教職員です。そして、今回、その学生達が、旧体育館を残してほしいと言っていると聞いております。

「学生一人ひとりの声を大切にする」ということを大学案内、ホームページで本学の特長として謳っております。この体育館で授業を受けたり、サークル活動でダンスを踊ったりした学生たちが、校歌にあるように「・・・少女等の生くる喜、胸うつはここ」と感じるからでしょう。

(3) これからの東京女子大学の教育環境づくりのために：

先日のメールでも書きましたが、同窓生、在学生は勿論、これから入ってくる学生のために、東京女子大学は、このように学生が愛する建物を大切にする大学なんですよと伝えることの意義が大きいと思います。そこに共感を覚えて入学する学生がたくさんおられると思います。

なぜならば、それは、「東京女子大学に入学するあなた方を大切にしますよ」ということと同じことだからです。主役の学生一人ひとりを大切に見守る、それが本学の教育理念ですから。

この旧体育館への思いが、これからますます重要になってくる教育環境づくりの土台のひとつとなり得ること、そしてなによりも本学の建学の精神、教育理念につながるものであるということに気づいていただけるとよいのですが。

文理学部 教員 A

OC氏→B氏とA氏へ

A先生からメールをいただき、いくつかさらに、旧体問題の教育的側面を考えてみました。

・今回の問題を教育問題としてとらえたときに見えてくる、解体計画の問題点

1. 教育理念との矛盾

2008年度第一号学報に、東京女子大のリベラルアーツは、1)「ひとりひとりを大切に 生きる自信を与える教育」と説明されていますが、今回のように学生～教職員～卒業生「ひとりひとりの」思いや意見——しかも少数意見どころか、決して見過ごせない大きな声——に、まったく耳を貸さず、門前払いし握りつぶしているように見えるやり方は、この理念と著しく矛盾するよう見えます。逆に、旧体を保存維持して、とくに（この建物を愛している）学生たちの意見をくみ取って活用しつつあれば、それは、正に、教育理念を具現化したものになるのではないのでしょうか。

同様に、2) 「心を自由にし真理を探究する」とあります。リベラルアーツを教えれば、提起された問題に誠実にとりくみ、疑問点についてしっかり考え、異義を唱えることもありうるのは、あたりまえ。この点でも、教育理念と矛盾。今回のような疑問が教職員から出るのは、「知識」を「英知」に変えることを日々考えているからこそでしょう。

2. 女子大が培ってきたよき伝統（建学の精神？）との矛盾

「犠牲と奉仕」とは、ただ無私の自己犠牲を言っているのではなく、自身にも他者にも「謙虚で誠実である」こと、を言っているはず。それを徹底して教えられる（教えられた）ため、卒業生同士でも、無条件とあってよいほど、同窓生とわかると心を許しお互いを信頼するところがあつたのです。それなのに、このところの、ころころ変わる旧体や3号館解体の理由や、弱者切り捨ての人員整理などで、すっかり、母校そのものへの信頼感がゆらぎ、教職員には不安の要素となっている気がします。また、卒業生に流布しているままの「経済危機警報」と「現代の女子学生は新しいもの好き」という刷り込みも、まさに、そうした価値観への信頼を失わせ、母校の方向性への不安をあおるもののように思えます。

・具体的に保存によって活かす形としては

1. 現代性をもたせた「社交」の場

「他者との和」（湊学長はこれを、新渡戸の言葉から、「どれだけ高い理想を抱こうとも、実行にあたっては譲れるだけ譲り、おれるだけおれていくのが大切」と解釈し、それが現れているのがS&Sである、とされていますが）人と和する場としての、社交を尊ぶのが、本学建学理念の根底にあるのは間違いないことなので、それを、だれもが実感できるような場として、暖炉のある部屋をラウンジに、一階やバルコニーをカフェテラスにします。それらは、学生・教職員・卒業生・（近隣の人も？）だれでも、気楽に分け隔てなく使える「コミュニケーションの空間」と位置づけることができます。

今年、奨励費研究で継続研究をした学生は、新渡戸の「社交」を、現代的にとらえ直すと「コミュニケーション」と置き換えることができる、と結論づけていました。なかなか説得力のある分析結果でした。過去と現在、現在と未来の女子大とのコミュニケーション、現在集う人同士のコミュニケーション、自然と人間のコミュニケーション、自分と他者のコミュニケーション、知性とくつろぎのコミュニケーション、など、いろいろなコミュニケーションを味わう場、として活用することが可能ではないでしょうか。

2. 活きた「国際交流」を体感する場

レイモンドの建築群を作った時、アメリカの女性たちの尽力で資金が集められ、可能になったと聞きました。1970年ぐらいまでは、こうした校舎の大切さや価値を教えていたらしいのですが、私は教わったおぼえが一度もありません。学園紛争で消えたのかもしれませんが。いずれにしろ、カナダの宣教師たち、アメリカの女性たち、新渡戸、レイモンド、安井てつ等を経て成立しえた、ソフトとハード両面における歴史は、まさに活きた「国際交流」の好例。それを、写真やアーカイブズ類で記念・記録し展示して学生に教えると共に、さらに、新たな国際交流を行なった学生達の活動の例を紹介していく場にできるのではないのでしょうか。（もちろん、ここは、海外からのお客さまや留学生たちとの「社交」「懇親」の会場としても活用します。）

現代文化学部 教員 C

B氏→C氏ほかへ

(前略)

D 先生の案を拝見いたしました。私の中の整理もまだ不十分で認識不足の点もあるかと思

いますが、企画も迫っておりますので、この段階でお送りいたします。

A 先生から「旧体育館を教育理念・実践に活かす」ことの重要性が指摘されました。理念というものは、建物がなければ継承できないものではないし、建物を残せば守れるものでもありません。

「テラス」等の案は楽しそうではあるのですが、活かしたい教育理念がまだ充分示されていない気がします。教育の問題と認識されるためには、そこをもっと明確にしていく必要があるように感じます。

旧体育館は「体育兼社交館」として開設されたとのこと。社交socializeということばは、学生奨励費研究の報告書では「自己の確立を基礎に持つ『自己表現能力』と『コミュニケーション能力』であり、それは東京女子大学創立に期待されていたものである」と解説されています。（ライシャワー氏のことばの引用だけではなく自分たちの納得できることばで説明が加えられていることに敬意を持ちます。）そのことばには共感しますが、学生ホールや改装された図書館にも交流の育つ場所としての役割は可能でしょう。

個人的には、「日常の中で透明性（手の内を見せる知的勇気）を貫くという理想を、初期の建物に読み取ることができる」のは素敵だと思いますし、授業の中でそれを体験を通して伝えることができれば素晴らしいと思います。ただこれは、現在の不透明な体質に対する批判・当てこすりとして反感を買うだけかもしれませんし、ことばだけの綺麗事にしない覚悟が必要です。

2005年ころ凄まじい財政危機警報がありました。学内の私たちには、その後組合執行部のご尽力によって、法人の見解が実態とは異なるという情報が入りましたが、卒業生に対しては法人からの広報が続いているのでしょうか。旧体育館解体の必要性の根拠、維持費用にも影響する財政状況に関して、大学（法人）から卒業生にどのような情報が提供されているのか、学内と情報を共有することが役に立つかもしれません。また、学生奨励費研究のように、足もとを調査し、そこに立っていることの意味を見出せる在学生がいることは、卒業生にとってとても喜ばしいことだろうと思います。

音響効果や床の感触などは、偶然得られるものではなく、技術と感性に支えられているのだろうと推測いたします。その背景には日本の能舞台との出会いなどもあったのでしょうか。そういう発見がまだあるかもしれませんね。他にもルーツはあるのだろうと思いますが、無防備なほど外に開かれ想像力によって境界を柔軟に変える可能性を持ちながら、同時にひとつの完結した空間を作っているところにも、能舞台に共通するものを感じます。

現代文化学部 教員 B



シンポジウム参加者より寄せられたご意見・ご質問

* 以下の文書は、当日、最初に司会者よりアナウンスし、シンポジストの発言を聞いていただいた後、集めさせていただいた、参加者の皆さんからのご意見、ご質問をまとめたものです。

1、意見・質問

○本学教員（文理学部）

この体育館の個別の価値はよくわかりました。今、右側に新建築棟が圧倒するような存在感で存在しており、反対側には図書館があって、それでも建築群の一つとして残す価値があるのか？（全体の統一性）

避難通路の確保という後付け？の理由が解体を考えている人たちから出されているが、専門家の立場からの意見をたまわりたい。

○本学教員（文理学部）

文化史的、教育的な価値と存在意義は、皆様の認識と同じです。
私も是非残すべきであると強く願っています。

建築計画・維持の為に費用等を今一度熟考するよう、大学当局に強く訴えたいと思います。

○本学教員（文理学部）

建築物の意義や愛着とは別に、「記憶の場」という観点からも保存を願っている。整備され、統合された上からの？「歴史」ではなく、人々が持つ記憶を集約する場は、コミュニティのアイデンティティを保証するものでもある。今後の東京女子大学のためにも必要な「記憶の場」であると思う。

○本学教員（現代文化学部）

旧体育館の価値と、解体に至る理事会の決定プロセスについて

これまで旧体育館の歴史的、また精神的価値について、多くの方（斉藤先生のお話にもあった）に語られてきたが、改めて保存の重要性を感じた。

私は海外での生活が長かったが、日本人がこれだけ多くの歴史的な建造物（寺院等・京都／奈良など）を誇りとしてもっている一方で、古いものに対する愛着がないと常々感じていた。あまりにも新しいもの、モダンなもの、テクノロジーに走りすぎ、生活のすべてにおいて、古いものを大事にしていない。外国ではもっと家やその他のもろもろのものを修理し、使い続けている。

理事会と大学の関係／教職員、卒業生など多くの方がこれだけ要望しているのに耳をかさない、再考しない理事会の態度・プロセスは、教育機関として大きな問題だと思う。

○本学教員（現代文化学部）

みなさまのご尽力のおかげで、悪天候にも拘らず、旧体育館満杯の参加者があり、さまざまな方たちから、旧体育館の価値や多種多様な魅力・特徴・歴史について、活きたお話をうかがえて、私には何よりもおもしろかったです。3時間半が本当にあつという間で、まだまだ語り尽くせない、言い足りないという方が多かったのも印象的でした。永井路子さんの（ご高齢ならではの？）軽妙洒落な語りぶりもよかったですし、その他、いろいろな発言にも励まされました。終わったあと学生や外部の参加者（一般の人や大先輩の卒業生）たち数名と話しましたが、みな、一緒に、ここにこしながら「来てよかった」と言っていっしょにいました。

たったひとつ残念に思えたのは、全体の時間が足りなくて、旧体育館の活用法の提案と、残して活用することの意義を語り合うのに、十分な時間がなくなってしまったことです。春休みのせいか、学生たちが少なかったのも残念でしたので、是非、今度は、あの体育館を使っている（最近まで使っていた）新旧の学生たちを中心に、もうひとつのシンポジウムを開けたらよいのではないかと思います。使用している人たちの観点を重視した視点で、活用方法とその意義についてさらに考え、具体的に提案できるとよいと思います。

○本学教員（現代文化学部）

あの建物があんなに輝いて嬉しそうだったのは何十年ぶりか、と思いました。きれいなお花も飾ってもらい、大勢の人にたくさん見てもらい、音響のよさ、いろいろな視線をいろいろなレベルから集め、見て見られる関係を活かした工夫など、とても誇らしげに、でも慎ましく、いっぱい見てってね、と言っているのが聞こえてきました。やはり、建物は使われてこそ、です。

○本学非常勤講師（学外者、大学教員）

なぜこんなに使いやすい建物をこわすのでしょうか。夏涼しく冬暖かく音響もばつぐんです。他の場所でも授業をしましたが、何処よりも使いやすい建物です。

長年「日本の踊り」伝統芸能の授業をしております。

○元本学非常勤講師（卒業生（61文・英米）、大学教員）

人間の教育には、精神（本学ではキリスト教）、知力、体力が基本となる。チャペル、本館／校舎とともに旧体育館はこの三つの柱を象徴する。

各大学は自己点検・認証評価を求められ、建学の理念に戻って説きおこすことを求められている。

東京女子大学は空論ではなく、この旧体育館によって建学の精神を証明できる。本学にとり貴重な財産を失ってはいけない。

文化財としての価値はいうまでもない。

私事ながら在学中体育禁止（虚弱）だった私は、旧体2階の部屋で授業を受け、フロアで社交ダンスのステップを学んだ。なつかしい場所である。

○学生（文理・日1年）

旧体育館の歴史的・文化的価値について

永井さんがおっしゃっていた通り、「思い出として残る」と「旧体育館が実存する」のでは伝わる歴史の重みがちがいます。

その建物、遺跡が“存在”する歴史の重みこそ、学問で大切なことです。まして、東京女子大学は歴史学、女性史に力を入れている大学です。その大学が、適切な理由なく、歴史の重みを背おっている旧体育館をなくすことは、許されないと思います。

○学生（現文・地1年）

補強・改修等費用に関する問題について

維持費は高くついてしまいますか？

○学生（現文・言4年）

私は、この春東京女子大を卒業します。私は、レーモンド建築の建物が大好きです。Quaecunque Sunt Vera の文字の刻まれた本館の堂々とした佇まいや、心落ち着くチャペル、間違いなく日本中の、いえ世界中のどんな体育館よりも美しい旧体育館など、歴史の深い建物のある風景の中で大学生時代を過ごすことが出来たことを、とても誇りに思っています。それなのに、どうしてレーモンド建築群の姉妹である旧体育館が、取り壊されなければならないのでしょうか。文化財に登録されているか否かで、保存か解体が決められているのだとしたら、いったい大学は、文化財に登録されている7棟の、どこに価値をみいだしているのでしょうか。とても悲しく思います。

この4年間、東京女子大学の古い建物たちに詰まった、建学の精神を実際に繋いできた過去の先生方、学生達の思いを感じてきました。東京女子大学は素晴らしい理念をかかげていますが、それに、実質上、90年の間命を吹き込んできたのは、標語ではなく、そういう心だと思っています。建物たちに、もちろん、旧体育館にも、女子大の心がしみ込んで私たちに語りかけ、導いてくれているように思います。これからはずっと、後輩達が、過去の数多の先輩方の、そして私たちの心の住処である、世界で最も美しい体育館のあるキャンパスで学ぶことができるよう祈っています。

○学生

オープンスペースの必要性について

オープンスペースが欲しいとの声が学生からあがって、旧体のとりこわしが決まったのではないはず。

私を含め現学生たちがとりこわしに反対をしているのにも拘わらず、とりこわしを続けるのなら、理事会の方たちは学生を全く無視しているのと同じです。何のための工事なのかわかりません。広場があってもお弁当を食べる学生がちらほらいるような凶しか将来凶が思いうかびません。悪目立ちしてしまうのを避ける人多そうです。安全面が問題ないのならば望まれていないものはつくるべきではないと思います。

○卒業生（47 国専）

居心地のよい、心の安らぐこの体育館をのこしてほしいと、切に望みます。

○卒業生（48 専・数）

材料、資料を出さないのは、どこ（大学・理事会、建築会社、etc.）、だれ（事務局？）なのか。学長が「ノン」といえばやめられるか？

責任の所在をはっきりさせることが大切ではないのか。三菱地所一清水建設の問題なのか。理事会・教授会などを含めて、学長も替わっているし、職員も変化しているので、利害関係も含めて、至急懇談してほしい。湊先生のご活躍を期待したい。

○卒業生（48 専・数）

私共 20～23 年の 3 年間在学した者として（戦後の苦しい時代）、一番思い出に残るのはこゝで 1 晩（土～日）泊まって演劇をしたり、歌を唱って楽しんだ思い出です。多目的なホールでした。勿論（体育や社交ダンスもしました）後で聞けばレーモンド建築として大切な歴史的建築と聞き、この貴重な建築を残せるものは残して欲しい。解体してしまったらもうお終い。ヨーロッパを旅して古い建築を多く残している事を感じます。

○卒業生（55 短・国, 57 文理・社）

・文化史的価値としても、かけ替えのないものと思います。

私の様な高齢者にとっては、ノスタルジイと言われるかもしれないが、若い方の研究の成果等も見、使い勝手の話も聞くと、どうしても残してほしいと思う。

・費用については、広く募金を行う事を提案します。

場合によっては新聞等にこの運動をとり上げてもらう様働きかけては？

永井さんのお話は全部知っている事と経験した事でしたが、忘れていました

○卒業生（58 文理・英米）

補強・改修等費用に関する問題について

ア) 費用の見積り額（取り壊し費用にいくら足せば修理・補強費用が出るのか）を出してもらい、卒業生を中心に募金運動をしたらどうか。

イ) メディアに訴えること、PRが必要。「保存」が現在追い風になっていることもプラス材料。

○卒業生（58 文理・英米）

現在、都市が高層のハコモノで溢れていますが、それは町を活性化するどころか、むしろ非人間的なものにしている感があります。

このような時代に、歴史的文化的価値のある古い建物を残すことは、一般的に難しくなっているようですが、少なくとも東京女子大という教育の場で保存の努力を示すことは、社会に対する一つの大切なメッセージになります。

歴史的文化財をとりこわすことは、東女大の理念であるリベラル・エデュケーションに、まさに反することになります。

○卒業生（61 文理・英米）

耐震問題、補強・改修等費用に関する問題について

老朽化と耐震強度の不足を解体理由とするなら、杉並区が都の公的機関による調査と対策の検討（費用も含めて）を大学として依頼し、その結果を公表してほしい。基礎に問題がなければ補修や改修は容易で、素晴らしく美しくなる。

○卒業生（61 文理・英米）

補強・改修等費用に関する問題について

重要文化財に登録すれば、修繕費や改修、耐震の費用が沢山出ると聞いております（5割とか8割とか）。

自由学園の明日館や早大もそれを利用したと聞いています。旧体育館は十分その条件がありますので、登録しましょう。

○卒業生（61 文理・英米）

補強、改修費等は広く卒業生に呼びかけて頂きたいと思います。

○卒業生（66 文理・社）

補強・改修等費用に関する問題について

経費は予算の使い方の中で工面するのが第一ですが、補強、改修等費用についての寄付もつのはどうでしょうか。

○卒業生（66 文理・英米）

柏市男女共同参画社会推進協議会（千葉県）に参加しています。日本の男女共同参画の歴史を語る時、東京女子大の建学の哲学は非常に大きな役割を果たしているといえます。それは私の心の歴史でもあります。

地方都市で、女に学問は邪魔だと言われた高校時代、東京女子大の「女子大なのに家政学部をおかないことの意味」「東寮に個室があることの意味」それに驚いた若かりし頃の興奮が、この体育館に立つと新鮮によみがえって来ます。若い人を連れてここに立つと、その頃のことをとうとうと伝えられる歴史の重みがあります物語りがこの中から生まれます。なかったら、そんなにも興奮して伝えることが出来るのでしょうか。本物にふれるよろこびを次の世代の若者にも伝えて下さい。

○卒業生（70 短・教，72 文理・日）

今日のシンポジウムを生み出したものは、「知らないでいたことの無念さ」をなくずしにできなかった、できなかった人達の思いにあり。

知る喜びに最も近く深くあってほしい大学が（たまたまの人達により）自らの歴史を守らないでどうするのでしょうか。

○卒業生（83 文理・史）

補強・改修等費用に関する問題について

杉並区長から、旧体保存の要望書が出されたということですし、是非、杉並区の文化財指定をしていただきたいと存じます。そうすると、改修・補修費の何割かを区に負担していただけると伺っています。

○卒業生（89 文理・日）

取りこわさなかった場合、どのようなデメリットがあるのでしょうか？

○学外者（歯科医師，周辺住民）

景観について

青梅街道から善福寺川に向かって西に下る坂道を、私は宮下富士見坂と名づけています。通勤コースで、宮下歯科医院にちなんでこう勝手に名づけたのでした。東京女子大越しに富士山が見

える大切な通りです。東寮がとりこわされ新しい建物ができ、あつという間に富士山が見えなくなりました。

部外にもこのように影響をうけている人もいるのだということを感じておいて下さい。体育館にもこのようなことを考慮して下さい。

○学外者（大学教員・名誉教授）

維持・活用の基本となる考え方について

アカデミー賞を得た映画「おくりびと」には印象に残るシーンが多い。その一つは、納棺師が「仏教でも、イスラム教で、ヒンズー教でも、キリスト教でも……旅立ちを心をこめて送る」という趣旨を述べる場面。多神教の日本文化が普遍性（癒し）を獲得する。もう一つのシーンー主人公夫妻が失踪した夫の父親と亡くなった母親が残したレコードの1枚をかける。クラシック音楽が流れる。たくさんのクラシック・レコードがきれりに並べられて、完全に室内の一部になっている。そうした風景が日本文化の一部になっている一驚くべきことに、西洋音楽を僅か100年ちょっとでほぼ完全に自らのものにしていくことを世界の人々が感得するに違いない。旧体はすでに日本の風景になっているのではないのでしょうか（建築史上の異議もあるでしょうが、それだけではないでしょう）。

国際関係の中の文化について考え、論じて来ましたので、私はグローバル化時代の文化をどうすべきか、一生懸命に考えております。文化もうつろいますが、一人一人の命よりも長くあるべきです。「よい文化」一人々がそれを活用し、いつくしむ文化ーは保存され、活用されるべきです。かけがえのない文化はいとおしみ続けたいと思います。「生きているもの」を殺して「旅立ち」させることはできないはずです。

○学外者（デザイン関係）

問題の原点について

再開発プログラム作成時点で、現体育館の保存の検討は行なわれたのか？

設計者の指名以前に、コンサルタントは存在したのか？

設計者がコンサルティングを行ったとすれば、多様な選択肢の検討が行わなれなかった可能性が高い。

最初から解体を前提としたプログラムを作成したと考えざるを得ません。

「全て手遅れ」の感が有りますが、再開発プログラムをどこまで戻せるかが今後のテーマではないでしょうか？

○学外者（元建築関係）

安全に関する問題について

建物も人間と同じで、生き物であり、昨今は近代的な技法で、建物診断が行われています。従って、診断を充分に行った上で、解体になるのか保存になるのかを決めるべきだと思います。

安全性に問題がなければ、是非保存し、次の世代に残したいものです。

○学外者（建築関係）

耐震問題、シンポジウム開催の経緯について

耐震性能はかなりあり、そんなに多くない費用で補強ができると考えます。きちんとした調査を行ない、結果を公表するべきと思います。

このシンポジウムを開く事が危ぶまれたと聞いております。自由な言論に立脚すべき学問の府において、ディスカッションが制約をうける状況があるとしたら、女子大はいったいどうなっている？と疑問をもちます。

もうすぐお彼岸がきます。私も、亡くなった父親の墓参りに帰るつもりです。ふるさとは、90才になる母親が健在です。今でも困ったときの支えになってくれる母です。子どもたちも、やさしいおばあちゃんを慕っています。

こわされてしまった西寮、東寮を亡くなった父親にたとえるなら、この体育館は、いまなお健在の母親です。この母親の胸で、ひざ元で育った卒業生にとって、母親のいなくなったふるさと、

この体育館がなくなった母校を想像することは、胸がつまる思いだと、お察しします。やさしい母、やさしいおばあちゃんに長生きしてほしいというのは、子どもたち、孫たちの共通のねがいです。(お彼岸に兄弟が母のもとに集まることを楽しみにしています。)最初に申しましたように、こわす必要もなく、このまま残して使い続けることができる価値のあるこの体育館を、どうか、ふるさとのおかあさんのように、大事にしていきたいと、思います。

○学外者 (レーモンド設計事務所)

パネリストのお話にもあった、建学の精神性を象徴する建築、そして多数の卒業生の記憶に残る建築が、貴学のみならず、他の学校・キャンパスにおいても次々に姿を消していく現実を、建築設計に従事する一人として、むなしく見て参りました。

せめて、この建物が保存され、また愛されますように。

○学外者 (日本遺跡学会員)

耐震問題、安全に関する問題、補強・改修等費用に関する問題について

(耐震性は)問題ないのでは(コンクリート造りである)。

危険の箇所は見当たらない。

費用は多少は必要であろう(木部、金属部等が少ないので見当たらないので)。

体育館という文化財は日本中さがしても多くないと思いますので、指定へ向けてがんばってください。

○学外者 (建築関係)

大学内には、数多くの重要な建築があつて、すべてを同等に扱うことは無理があると思う。

旧体育館の立地と必要性から、今回のように、取り壊しの決定がなされたことは、仕方がないとも思える。

でも、魅力ある建物ではあるし、使い方の可能性は、まだあるはず。

保存=形をそのまま残す、というのではなく、この建物の素敵な部分をどう伸ばすか、活かせるか、魅きつける案が必要だと思います。

論だけでなく、説得できるだけのビジュアルを学長側に提示して、心を動かさないと、壊わされるのは回避できないのでは、と思います。

○学外者

耐震問題について

・感覚的に、中央部のコンクリート柱~アーチの断面が細いように思われるが、大丈夫でしょうか？

○学外者 (他大学院生)

理事側の意見について

学外の者ということもあつて、そもそもなぜ解体しようとしているのか、という疑問を持った。理事側の見解にも興味を持った。

解体してオープンスペースにするとあるが、東女にはすでにオープンスペースがあると思う。解体費<維持費ということであれば、解体するメリット>残すメリット、となる使用法を考える必要があると思う

○学外者

建学の精神に基づいて、女性の教育を再考する拠点にするための方策を考えてほしい。実験空間。

○学外者

耐震問題、補強・改修等費用に関する問題について

・松嶋先生が説明して下さった内容によれば、補強だけで充分使用できると思いましたが。それに、オープンスペースが必要であれば、隣の建物を壊す(ということですね)ことで十

分だと思います。

- ・このような気持ちのよい居心地のよい建物は新築では作れないです。費用や計画を変更する場合のコスト増は、工期のことは分かりませんが、**80**年以上ある価値ある建物を現在の数人の意志決定で壊すのは、やめた方がいいと思います。
- ・新築した体育館のほうがずっと機能的だと思いますが、伝統があり価値あるものを残すことは大学の大事な役目だと思います。

○学外者（他大学生）

耐震問題、安全に関する問題、補給・改修等費用に関する問題について

歴史的価値の高い建造物において、耐震問題、安全性、補強、改修の必要性があったとしても、解体することは聞いたことがない。また解体する理由にはならないと思います。

○学外者

何故解体するのか？

是非保存し、活用することを考えて欲しい。

シンポジウムに参加して気になった1点：現役の在校生、現職の教職員へのアピールと討議への参加が不可欠のように思います。

○学外者（他大学生）

安全に関する問題について

使用する学生さんが、実際に感じられた“不安”などはあるのでしょうか？ もしあれば、どのようなものでしょうか？（1についてはアピール文③を支持）

学生さんからの活用案などももっと聞いてみたかったです。（過去に、この建物がどのようにかわれたかをきき、建物が生き生きとして見えましたので）。そして「単位にかんけいなく」体育をとりつづけた学生さんの自ら共に学ぶ姿勢に、文系、理系を越えて教育研究機関として学生さんも先生もこの問題にとりくまれている姿勢に、感銘を受けました。

又、今日集まった方々の関心事について知りたいと思いました。機会があれば、隣の席の人どうしがもっとはなせるような会になれば。

○学外者

モダニズム建築初期の絶妙な試みと調和、この体育館の中で、貴重なお話の数々を伺うことで、その真価を改めて感じる事ができました。

光と視線の交差があらゆる角度から違った景色を見せてくれます。緩い雰囲気と時代の記号が織りなす空間は、少しも古びた印象ではありません。

しかも、建学の精神を表象しているこの建築を、本学のこれからの歴史にとっても、貴重であると考えます。

この機会を大学側からの代表者が参加して下さらないのが残念の限りです。

言論の府である、大学であるからこそ、歴史的建築物に対する、時代を先がけた、保存への姿勢が強く望まれると思います。会を企画・運営された皆様に御礼申し上げます。

2、活用方法の提案

○本学教員（文理学部）

体育施設のみならず、文化施設としての活用を考えたいと思います。

(例)①部分的に第二図書館に利用する。

- ②談話室等、構成員の交流の場に活用する。
- ③従来通り、体育施設としても利用する。
- ④ゼミ室として、大学の教育機関として活用する。



○本学教員（文理学部）
Café、避難場所

○本学教員（現代文化学部）

もとの旧体の思想に戻って、身体、心の育成、社会的な価値を見直すとよいと思う。

日本ではまだまだ社会的に多くの人々と出会う（話す）機会が少ない。日本人は他人に対する思いやりが大事であると思っている風土があるが、ソトとウチという大きな区切りがあるという特徴もある。その為よその人に対しては冷たかったり、他人と交わるのが不得手である。学会のパーティなどでも知った人と話すだけで、自分から積極的に知らない人の輪に入ったり、人間関係を広げることができない。これは国際関係においても同じで、外交がへたである。

この旧体は、そのようなシャイネス、内弁慶的な心を開放するよい社交場として、有効活用できるのではないか。

○本学教員（現代文化学部）

Café、学生・教職員・卒業生皆にとっていこいの場、過去～未来の歴史を共有する場

○本学教員（現代文化学部）

「国際交流センターに」

カナダの宣教師たち、アメリカの女性たち、新渡戸、レイモンド、安井てつ、らを経て、成立しえたソフトとハード両面における過去の「国際交流」と、新たな国際交流を行った学生達の活動の例を、記録・紹介して、教職員と学生で共有する場にする。

○学生（現文・地域1年）

- ・カフェ
- ・演劇会を再び…！（東女の名物に） 演出者は応募・選考
- ・ダンスパーティを開く

○学生（文理・哲4年）

土合先生がおっしゃっていた、一部分をカフェテラス（コーヒーショップ）として使用したりする、という案は良いと思います。（計画委員側が）「オープンスペース」と云いますが、それなら本館前、正門奥の「中庭」（だけ）で十分な様な気がします。

○学生（現文・言語4年）

体育館としての需要があるのだから、そのまま使うのがいいと思います。

皆のいこいの場として使用するなら、授業のない時間に身体を伸ばしたり、軽い運動ができるような場所になればいいと思います。

○本学非常勤講師（大学教員）

- 1 伝統文化を学ぶ…教室に。
- 2 イロイロなイベントにパーティーに。
- 3 小教室は、授業、同窓会主催の喫茶室、談話室として。

○卒業生（48専・数）

- 1 簡単な床暖にすると活用がふえると思う。
- 2 利用料金も考慮して、開放されると利用価値が出る。（杉並区民のために）
- 3 窓ガラスは強化ガラスにすれば危惧は避けられる。
- 4 広場は、スロープを強行破壊したので、その罪の意識で作ろうとしたのではないか。
- 5 隣の体育館はこわしてもよいと思うし、そこに横にスロープの芝生を作るのは善いのではないか。（別紙参照）
- 6 壁面利用の展示会など学部を横断して。

○卒業生 (61 文理・社)

外国の色々な会合の写真をみると、こういうフロアーに丸テーブルを置いて、音楽家を招いて **dinner show** をする、が印象に残っている。野村万作さんのような大物でなくても、こじんまりした室内楽を楽しむ会 (**tea party**) を月に一度くらい催して欲しい。卒業生の娘・息子に音楽家が多いから、彼らの発表の場にもなる、と思う。

○卒業生 (61 文理・英米)

ダンスパーティーや、色々なパーティーにイベントに使っていただきたい。
学生にも提案を募ったらいいと思う。

○卒業生 (61 文理・英米)

体育の授業で使う他、各種イベント会場、地域との交流。
クリスマスパーティーや園遊会の会場としても使える。とても居心地のよい建物で自然光のやわらかさがとてもいい。女子大精神のシンボル建築の1つとして永く活用していただきたい。

○卒業生 (61 文理・英米)

Exile という音楽グループがプロモーションビデオを撮影、「なういじゃん」「カッコイイ」と云ったそうですね。
博物館としてフロアを使い、四隅の談話室は喫茶と読書と出来る音楽も流して、リラックスルームとする。
運営は、卒業生のボランティアで、無料で出来ます。海外の博物館は市民のボランティアを上手に使って運営されています。その方式で可能です。
博物館としてもシンポジウムの会場としても貸し出せる。→ ◎利益を出せる。

○卒業生 (66 文理・社)

学生・教職員とにオープンスペースとして、社交の場として、そのまま開放してはどうですか。オープンスペースがかならずしも野外でなくてもよいのではないですか。
消防等の安全への配慮は考えるとしても(木を少し切る等)、ヨーロッパなどでは中世、ローマ、古代の遺跡が数々のこり、街全体も近現代あるいは中世の街なみそのまま使っているのもめずらしくなく、それはとても優雅です。日本はその点建築がバラバラで統一感がなく、国全体としてのコンセプト、政策がまだまだ低いと思います。

○卒業生 (66 文理・英米)

元気な団塊世代を眼中に入れ、同窓会などのイベントに貸して、場所代を取る…若かりし頃を思い出して、心なごむひと時をかもし出してくれることでしょうか。…維持費ねん出。ここに来れば、昔話がつぎつぎと沸き出てくる…。
若者にとっては、母親のふところのぬくもりを感じて心ほぐれる…。
という場所を、広く提供しては、如何でしょうか。

○卒業生 (70 短・教, 72 文理・日)

東京女子大の歴史、精神をつなぎ、育んでいくための学びの場とする。
歴史の中に身を置いて、歴史を学ぶことの素晴らしさを広める場とする。
「知らないでいたことの無念」が歴史を守った、歴史に光をあてた、その場として次に伝える。

○卒業生 (77 文理・哲, 79 院・哲)

コーヒーショップかティールームを誘致するという案は素晴らしいと思います。できればスターバックスなどのように、ごみがたくさん出るような店ではない方がいいです(エコロジカルな店)。

○卒業生（80 文理・史）

生涯学習センターとしての活用：

現在、各大学では生涯学習に対するアプローチとしてエクステンションセンターに力をそそぎ、様々なプログラムがありますが、東京女子大学は立ち遅れていると感じています。大学の卒業生が、母校に戻り、また学ぶことができる場を、ぜひこの旧体の建物を活用して頂きたいと考えます。

○卒業生（83 文理・史）

これまで同様に、現役の体育館として、あるいは劇や催しの会場として、大いに活用していただきたいと存じます。体育を通して、在学生、同窓生が、体験を共にすることは大きな意義があると存じます。

○卒業生（83 文理・心）

- ・舞台として
- ・コンサートやライブ会場として
- ・床に寝っころがる仮眠室的な？
- ・ココロの相談室とか

○卒業生（89 文理・日）

社交館としての本来の意図を生かし、レセプションホールとして使えば、新しいビルの部屋では得られない温かい空間になるでしょう。高い天井やバルコニーのついた小部屋など、今では再現しがたいエレガントな雰囲気、ぜひ学外のお客様にも味わっていただきたい。

ダンス系の部活動には音響効果等、新体育館ではかえがたい空間だといいます。

またバスケットゴールを取りはずし可能にして、演劇や音楽の部活動にも、(かつての大先輩方のように) 使えるのではないのでしょうか。

○卒業生（07 文理・英米）

土合先生の「旧体のどこかにコーヒーショップを誘致する」というプラン、とても面白いと思いました。そこで、考えてみたのは、業者にたのむ、というのではなく、学生が運営するという事です。「コーヒー店運営を通じて経営(?)を学ぶ」講座があれば、とても実践的で面白いのではないのでしょうか。学生はこの講座を通じてマーケティング、広告、会計、仕入れ、内装、接客など様々なことを考え、学ぶことができると思います。指導できる先生がいるのか、初期費用や赤字が出た場合はどうするのか等、問題点も多くあるとは思いますが、こうした実践的な授業があれば面白そうだと思います。

○学外者（日本遺跡学会員）

コンパクトな建物なので、多目的に使えるのでは。とてもシンプルで美しい体育館ですね。南・北の明りどりが抜群です。

○学外者（建築関係）

本来の用途である社交館として、そのまま使いつづけられると思います。

北側に広場が残りますから、北側下方の壁をとりさり、南側と同じようなサロンの下家をつけたし、広場に向かって開放的な形にしたら、いっそう効果的な建物になると思います。

緊急時には、避難拠点、救援拠点ともなりうると思います。

○学外者（杉並区たてもの応援団、周辺住民）

当体育館は、他の一般的な体育館と違い、「社交館」と呼ばれたように、中央フロアは周囲からの視線を集めやすい構造になっている。1階三方は段差になっており、2階講義室の窓から、あるいは2階南側の通路からも中央フロアは視線を集めやすい。ゆえに、演劇等で活用されるのが良いと思う。

2階の窓・バルコニー・1階の1段上がった周囲の通路は、演劇の「場」としてふさわしいと思

う。

○学外者（大学教員，他大学名誉教授）

美しいキャンパスの、かけがえのない景観になっている「旧体」の全体を維持しつつ、内装や機能を「現代化」し、学生達が一層活用するようにする。外の広場と一体化した「オープン・スペース」とすれば、「社交館」の営みが増すのではないのでしょうか。今日、大事な体育館に土足で入れたのは驚きでしたが、外と室内の一体化はやり易いでしょう。（代案と思われるプランでは、外の広場に立木がなくなっていますが、）立木を伐ってしまうことには反対です。

○学外者（他大学生）

確かに「伝統的」な風情ある建物だが、敢えて「実用性」の方向からアプローチしていくのはどうだろうか。例えば、「東女の歴史館」として、東女の歴史や、優秀な成績を修めたサークルなどのメダルを展示するなどして、在学生はもちろん、受験生に「東女」を知ってもらう場所にしてはどうか。歴史館の建物自体が歴史の 1 つであるといった具合に使用していけば、在学生も改めて、東女の伝統に触れられるのではないか。体育館としての機能は失われてしまうが、形を変えて新たな役目を果たしていくことも素晴らしいことだと思う。（内情を全く知らない立場なのですが、僭越ながら意見を述べさせていただきました。）

○学外者

- ・人間の全体性(心と身体、体のかたち、感覚／認知と出力の統合性、体を動かしながら学んだり、考えたり、コミュニケーションしたりすること)の重要性を研究や教育にとりこむための様々な企画。動きながら行える場はきわめて少ない。
- ・女性の真の意味での解放や、人間らしく生きるための女性特有の身体の問題の理論と実際を研究するための象徴的かつ実践的な場として使う。

○学外者

今までの活用のされ方と、土合先生のご説明どおりでいいと思いますが、それ以外には時々外部へ開放して、お芝居などが上演されると、とてもいいと思います。その際には一時的にカフェやバーをオープンさせてください。西荻窪の雰囲気とマッチして新名所になると思います。

○学外者（他大学生）

- ・サークル活動
- ・チャリティーコンサート等の会場
- ・バザーやフリーマーケット等の会場
- ・展覧会（絵画や書道）等の会場
- ・歴史史料館としての利用
- ・映画等の上映会場



○学外者（建築関係）

土合先生の、体育館の一部にカフェを設けるアイデアは非常に良いと考えます。カフェ業者を入れて営業させるのではなく、オペレーションを学生中心で構成し、学生による学生のための親しみのあるカフェを誕生させたら面白いと思います。最低限の、プロフェッショナルが提供し、オペレーションを構成する部分は必要ですが。

私は、そのようにしてカフェレストランを運営した経験がありますが、うまくいきました。

○学外者（他大学生）

旧体育館の新「社交館」としての活用—大学内では学科と学年を越えたコミュニケーション(教育・研究)の場として、大学と学外とのコミュニケーションの場として：

本日の歴史的な場に加え、お茶を 2F でいただき、又学生さんの発表を通して、「社交館」としての魅力にひかれた。この 10 年、国立大学では、教育・研究公開の場としてミュージアムを、そしてその後にそれらと連携したカフェやコミュニケーションを支援するセンターが、増改築によ

りつくられている（東大の総合研究博物館や芸術大学の美術館など）。これら施設を含め、大学で学内外に向けたワークショップを学生さんたちと共に何度かやった経験があります。最も頭をなやませることの1つが会場選びです（使い勝手、アクセス、そのつくり、中の配置、デザイン、etc）。今日のお話にもあった、旧体育館の、ガラス越しに外とつながれた建物、大小のスペースがエレガントにつながれた、誰のころにもすっと入りこめるような雰囲気（ペンキのはげなど、今は少し暗く感じますが）、コミュニケーションを支えるのにぴったりではないでしょうか。国立大が130年かけてやっと模索しだした「社交」ですが、90年の歴史を誇る東京女子大でぜひリードして行って下さい。今日、学生さんの発表をきき、又、先生方のお話を伺うにつけ、新「社交館」として何をするかというアイデアは、次々とうかんでくるのでは、と、うらやましく感じました。

キャンパス計画、原田理事長の「時はあたかも大学をめぐる時代環境は…建学の精神に立って二一世紀をリードする大学を目指して…」(学報)にも沿うと思われまます…。区からの要望もあるようですし。

○学外者

外部の者として、こんなに歴史と由緒ある建物の中でコーヒーを飲み、語らい合える場として活用できるよう考えて欲しいものです。

○学外者（建築関係）

生徒を集めるために、新しい建物が必要、広い広場が必要というのは、開発業者の宣伝文句で、実際は若い人もきれいに修復されたレトロな建物に魅力を感じ、伝統ある大学で学ぶ喜びを感じる。

広場も、建物に囲われ、分節のある空間はおちつき、安心感もあり、学生に好まれるだろう。旧体育館は新たな使命を与え、生き続けるべきである。

○学外者

サロン、講演、イベント、会場として、また、大学のシンボリックな建築であり、交流の要として、学生～OGまで広く活用できる開かれた場（トポス）にして頂きたいものです。この中にいると、ひじょうに安らぎました。（実感です。）

○学外者

土合先生がおっしゃっていた、文化サークルにも利用場所として開放することに同意です。以前、音楽会が旧体でひらかれたときにききに来ましたが、とても素敵でした。



レジュメ集他送付用理事宛公開書簡 (2009. 3. 19)

*以下の文書は、2009年3月19日付けで理事全員に3.14シンポジウムのレジュメ集他を郵送したさい同封した公開書簡に、若干手を入れたものです。シンポジウムの暫定的総括という意味もあると考え、ここに再録することにしました。(森)

東京女子大学理事長 原田明夫 様
東京女子大学理事 各位

いつもお世話になっております。哲学科の森です。ご多忙のところ、またしてもお邪魔して申し訳ありません。旧体育館シンポジウム実行委員長として、3.14旧体シンポジウムの件、当日配布資料をお送りするとともに、簡単にご報告させていただきます。なお、この手紙は、重要なお願いを含みますので、公開書簡という形をとりますこと、ご了承ください。

3月14日の午前中は、雨がちのあいにくの天気でした。前夜から朝にかけては風雨が強く、人出が心配されましたが、雨は午後には上がり、シンポジウムの途中から次第に晴れ間が見えて、終わったときにはすっかりきれいな夕空でした。参加者は250人を超え(「300人は来た」という声あり)、大盛況でした。公開シンポジウムの形で開催をお認めくださった皆様に、このたびの成功をお伝えできることを、喜ばしく、また誇らしく思います。

シンポジウム当日に配布された資料一式を、同封させていただきます。事前に用意したレジュメ集一冊と、当日追加配布資料です。ご参考にしていただきたく、お願い申し上げます。加えて、当日にパネルとパワーポイントで披露された「旧体育館を残してのオープンスペースのプラン」のイメージ図の一枚を、カラーコピーでお届けします。

2月27日の臨時大学評議会の席では、公開シンポジウム形式にすると混乱が予想される、と一部の教員が反対意見を述べたと漏れ聞いています。学長も学部長も、その点を心配していると、森に表明されました。しかしはっきり言って、混乱のようなものは一切ありませんでした。あれはまったくの杞憂でした。3月12日(木)に毎日新聞夕刊に開催案内が載りましたが、それもごく穏当な記事でした。良識ある学府としての東京女子大の宣伝になった、と確信しています。旧体育館にふさわしく、「社交」のエチケットをわきまえた紳士淑女の集まりとなり、シンポジウムは大成功でした。期待に違わず、重大問題を冷静かつ多角的に議論できる実りある機会になったことを、実行委員一同、喜んでおります。

以下、ゲストの方のご発言を中心に、その篤志への御礼の意味も込めて、シンポジウムの概要を若干ご紹介いたします。

本学名誉教授の斎藤康代先生は、創立期の偉大な理事ライシャワーの言葉を引いて、social graces(品格のある社会性)をみがく場としての旧体育館の意義を強調されました。今回のシンポジウム自体が、そのまたとない実践だったと思います。ご多忙のなか参加いただき、価値あるお話をしてくださったパネリストの方々に、厚く御礼申し上げます。運営全般に関してご協力いただいた教職員、学生、卒業生の皆さんに、心から感謝したいと思います。休日を返上して参加くださった教職員の方々にも、もちろん感謝です。このような公開シンポジウムの開催を認めてくださった大学評議会にも、謝意と敬意を表します。

昨年度の学会奨励研究賞をとった研究グループ代表の田代桃子さんは、「旧体育館について研究するにつれ、その歴史的、建築学的、教育的な価値を思い知らされ、蒙を啓かれた。そういうことを教えてくれる授業が、この大学で行なわれていないのは惜しい。今後はその開講を望みたい」と述べました。昨年度の研究仲間で、今年度の研究グループ代表でもあるコミュニケーション学科2年の斎藤治子さんも、田代さんの隣に立ち、旧体がその実践の場であるような「社交＝コミュニケーション」についてこれからも研究を深めていきたい、と抱負を述べてくれました。司会の石井先生も言っていますが、彼女たちのような自主性あふれる学生のいる大学に勤めていることを、誇りに思います。

永井路子先生に私は、15分で、と無礼にもお願いしていましたが、やはりそれよりは長い、しかし長さがつゆ感じられないほど愉しく、含蓄にみちたお話をいただきました。あのお歳である元気さには、感動を通り越して、呆れてしまいます（笑）。旧体育館に眠る秘話の数々を、ユーモアあふれる語り口で披露されました（あれを口で聞けるとは！）。近代建築もすでに歴史的価値を有することが近年急速に認められてきており、歴史を語り書く者としてその問題には関心をもたざるをえない、と強調されました。最新の専門学術雑誌を持参してその近代建築保存特集を紹介されるなど、時代の動きを敏感にキャッチする知的旺盛さが、印象的でした。そのますます盛んな探究心が、2008年度毎日芸術賞受賞作『岩倉具視』（文藝春秋）を生んだのだと思います。本学関係者必読の傑作です。

今をときめく DOCOMOMO Japan 代表の鈴木博之先生には、近代建築としての旧体育館の素晴らしさについて語っていただきました。具象作品は、言葉だけでは説明しきれないので、模像や模型を使ってプレゼンするのがふつうですが、今回のシンポジウムはそれを優に超えて、当の実物の内部で、その創意あふれる構造について縷々解説してもらえたのです。しかも、現代日本最高の建築史家の口からじかにです（ちなみに、サントリー学芸賞を受賞した名著『東京の地霊』は、最近、ちくま学芸文庫として再刊されましたので、ぜひご一読を）。紫綬褒章を受章している碩学じきじきの差出代表名で昨秋送られてきた、DOCOMOMO Japan からの旧体育館耐震診断書と解体再考要望文書を、本学は、「信用できない」と一蹴しました。信用できないのはどちらでしょうか。

ここで一言挟みます。2月26日に行なわれた理事長と教員3名との話し合いで、理事長先生は、旧体育館は「老朽化が進んで文化的価値も主要建物ほどではない」と述べた、と記録にあります。理事長には失礼ながら、この「判断」は誤りです。訂正をお願いしたいです。大正期に建てられた女子教育の体育施設として、東女大旧体育館は現存唯一のものであり、大きな窓や一段低い床をはじめとして、その秀抜なデザインは、比類なき文化的価値を有しています。他の七棟と合わせて、文化庁登録有形文化財はもちろん、重要文化財に指定されてもおかしくないほどなのです。そんな宝物を解体することは、文化破壊でなくて何でしょうか。口を開けば、維持費がかかると言う人がいますが、近代建築保存の機運がこれだけ盛り上がっている今日では、金銭的援助ならいくらでも期待できるのです。

招待パネリストの最後を飾って、松嶋哲英先生に、耐震問題を中心に語っていただきました。上記の DOCOMOMO Japan の耐震診断書を実質的に作成された、その方面の専門家です。日本建築協会の災害対策委員を務めておられ、耐震問題に関して抜群の見識と実績をおもちの松嶋先生がおっしゃったことは、私たちを驚かせました。旧体育館は地震に強いように出来ているので、耐震補強工事は必要ない、というのです。「旧体育館創建当時は、サンフランシスコで大地震があったり関東大震災が起こったりして、耐震に対する問題意識はきわめて強く、旧体育館はそれを反映した工夫が随所にみられる。現代の耐震技術の専門家にとっても、その構造上の斬新な発想には、学ぶべき点が多い」。これが、私たちが求めてきた「セカンドオピニオン」です。しかも、日本の誇る建築技術の最先端にいる方から寄せられた意見がこれなのです。

それでもなお、こう言い張る人がいるかもしれません。「具体的なデータにもとづかない推定にすぎず、信用できない」と。松嶋先生は、耐震計算上の条件としてのコンクリート強度を、よほど低く設定しても、それでも旧体は大丈夫だ、との診断結果を出されています。それに、過去の耐震診断の大学所蔵データの開示を大学に要求したのに、拒否されてしまっています。なのに、信用できないと断定されるいわれはありません。大学にコンクリートのコア抜き調査をする気がどうしてもないなら、私たちのほうで調査したいので認めてほしい、と申し入れています、これに対しても応答していただいていません。

松嶋先生の提題には、活用プランの提示もありました。一部の人が思い込んでいるのと違って、旧体育館を保存することとオープンスペースを作ることとは、なんら矛盾しません。つまり、新体育館を撤去したあとにオープンスペースを作ること、十分できるのです。旧体育館を残した形でのオープンスペースのプランも示してほしい、と私たちは言い続けてきましたが、それも一貫して拒否されています。そこで、今回のシンポジウムでは、この代替プランを目に見える形で出すことを、一つの目玉としました。パネルや映像で具体的に示されたカラーイメージ図は、旧体を残しても立派な広場ができることを、はっきり示しています。むしろ、社交館としての旧体をフルに活用し、学生にとっての学びと語らいと憩いの場として再生させることは、キャンパス整備の目指すべき方向と言えましょう。

安全性の問題とか、導線の確保とかいったことも、問題になりえないことは、専門家に太鼓判を押されましたが、じっさいこれは、誰にだって分かります。新棟が姿を現わした現在、旧体が邪魔にならないことは、あの場所に立って見てみれば、一目瞭然なのですから。理事の皆様、ぜひ一度自分の目で確かめていただければと思います。ついでに言いますと、キャンパス整備計画委員会では、「旧体が邪魔になって芝生が育たないから、壊さないでダメだ」といった意見が出た、と記録にあります。そのような笑止千万な議論が、まことしやかに語られる委員会のほうこそ、信用できません。

さて、今回のシンポジウムでは、活用方法を中心に全体討議になるべく時間をかけようと考えていたのですが、時間がおしてしまい、小一時間しかとれませんでした。これは反省点の一つですが、そこから学ぶべき点もあります。つまり、まだまだ議論を重ね、意見交換をする必要が、大いにあるということです。フロアからの発言者のなかには、G先生や大角先生のほか、レーモンド設計事務所の渡辺博文氏、日本遺跡学会会長の石井則孝先生、卒業生で作家の近藤富枝先生と、豪華な顔ぶれが並びました。その他の発言者も、ごくごくまっとうな意見を述べられ、感情に走ったり激昂したりした人は一人もいませんでした。会場には、東大名誉教授の平野健一郎先生もおいでになり、温かい励ましの意見書を寄せられました。旧体育館にふさわしく知的でエレガントな会を、という私たちの願いは、十全に達成されました。このよき知らせを理事の皆様にお伝えできることを、嬉しく思います。

シンポジウムの最後のほうで、杉並区長から3月5日付けで、理事長と学長に提出された旧体育館解体再考要望書の文面が、司会の石井先生より読み上げられました。これはもはやたんなる「外圧」ではありえません。杉並区にある私学が、杉並区長からの要望書を無視してよいかは、はなはだ疑問です。杉並区は文化事業に熱心な地域ですし、そこに位置する本学は、言うまでもなく、区の理解と支援を受けて文化事業に邁進すべきです。改修費用の確保、災害時の安全対策、建築確認再申請といった問題も、区からアドバイスを受けて再検討することが望ましいでしょう。

今回の反省点としては、上記の時間不足ということのほか、参加者の内訳の偏りということが挙げられます。とくに、理事の皆様やキャンパス整備計画委員には、誰一人出席してもらえませんでした。残念至極ですが、これは、私たちが反省すべきことではありません。私は、理事13名およびキャンパス整備計画委員の教員8名に、シンポジウム出席のお願い状を、返信葉書を同封して送りましたが、欠席返事があったのは、理事2名、委員2名だけでした（三菱地所設計にも出席依頼状を送ったところ欠席返事が来たので、返信があったのは計5件）。その出席お願いの手紙のなかで、私はこう記しました。しつこいようですが、念のため再掲しておきます。

「なお、万が一、理事のどなたにもシンポジウムに出席いただけない場合は、キャンパス整備計画委員かつ理事会陪席の教員に必ず出席し、大学としてのキャンパス整備の進め方について説明するよう、理事会としてご指示いただきたく、お願い申し上げます。公平を期すためのこの代案すら受け入れられずに、あとで「一方的立場からのシンポジウムだった」と決めつけられることは、私たちとしては、お断わり申し上げます。」

シンポジウムの最後に、アピール文を採択しました。その確定版も、同封させていただきます。どうかお読みくださいますよう、お願いいたします。穏当な内容であることは、誰の目にも明らかですし、この程度の要望なら教授会全体の支持を得られるのではないかと思います。私たちは大学人として当然のことを要求しているだけであり、このアピールはごく一部の教員の偏った意見などでは毛頭ないこと、ご理解いただければと存じます。

4月2日には、新しい一学部体制での初の教授会が開かれます。議題は目白押しでしょうが、旧体問題はそれらに劣らぬ緊急性をもっています。このままだと、5月に入るや、なんの説明会もないまま解体工事に入ってしまうからです。これほどまでに学内学外で解体再考要求が高まっているのに、です。工事の強行を許してしまうことは、教職員、いや大学全体にとっての恥辱です。旧体シンポジウムがこれほど盛り上がった今、説明会ぬきの計画続行は、もはやありえません。この点の特段のご理解とご高配を、理事の皆様切にお願いする所以です。説明会の開催にあたっては、石井先生がシンポジウムでの討議用に作成した重要レジュメ「なぜ旧体育館を解体しなければならないか」（同封資料A4三枚）を、ご熟読のうえ、そのすべての疑問に理事会として誠実に応答していただきたく、お願い申し上げます。

ちなみに、キャンパス整備計画委員会の席では、「壊す前に反対運動が起きても、いったん壊してしまえばもう文句は出なくなる」と語られたと、記録にあります。このような発言が不適切なのは、今は措きます。僭越ながら申し上げますが、この発言は事実として誤りです。旧体育館解体再考の声を握りつぶして大学が解体を強行すれば、それに対する怒りと憎しみと怨みは、未来永劫に残り続けることでしょう。そのようなわざわいの決して起こらないよう、理事各位の、とりわけ原田理事長先生のご英断を、切にお願いする次第です。

なお、シンポ記録集も近日中に刊行予定です。ご期待ください。当日取材に来てくれた朝日新聞文化面担当記者に、近々シンポの記事を書いてもらえる見込みです。こちらもうご期待です。いつもながらの乱文、平にご容赦ください。春の訪れは、寒さと仲良しです。お風邪など召されぬよう、くれぐれもご自愛のほど、お願い申し上げます。

2009年3月19日

旧体育館シンポジウム実行委員会
実行委員長 森一郎



3.14 シンポジウム記録集刊行によせて

あれほど知的刺激にみちた出来事は、そうザラにない。お酒こそ出なかったが、学園にふさわしく言論（ロゴス）をたっぷり堪能した大いなる饗宴（シュンポシオン）であった。この思いは、ひとり哲学屋のみの満足感ではないだろう。あの日、あの体育館に所狭しと集まり、あの熱気あふれる討議に居合わせた人たちは、誰しもそう思ったに違いないのだ。われわれは、人びとが一致協力して事を為すということにどれほどのパワーがみなぎるか、ということをもって感じ、その力強さに圧倒されたのである。

他方で、われわれはお祭り気分酔っていたわけではない。放っておけば、宝物のような体育館は、五月以降、問答無用とばかりに破壊されてしまう。事は恐ろしく重大であり、だからこそ頭を冷やし、衆知を結集して議論しなければならない。知識を英知に変える、という大学のキャッチフレーズそのままに、である。言論の祭典を厳粛に遊ぶ自由人たちの集いであったことを、主催者の一人として誇らしく思う。人間的自由の微光というものがあるとすれば、それはまさにあの瞬間、あの場所に閃いたのだ。

幾つもの意味において不思議な、自由の経験であった。教員が学生から学ぶということが、いかに豊かでありうるかが実地で証されたことも、その一つだった。旧体育館研究で学会研究奨励賞を受けた学生と卒業生が登場したあの瞬間こそ、ハイライトだったと、今にして思う。彼女たちからわれわれは、昨年二月と四月に学び、今回また多くを学んだ。大学の歴史を学ぶことの意味を。そして、真に大切にすべきは何かということ。

今回のシンポジウム開催にあたっては、パネリストの皆様をはじめ、数多くの方々に、絶大なご協力を賜わった。ご多忙のなか旧体育館のために犠牲と奉仕を申し出られた皆様方に、心より感謝申し上げます。また、記録集をこれほど早く刊行できたのも、意気を感じて文字どおり献身的に尽力くださった方々のおかげである。いちいちお名前を挙げることはしないが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

手遅れだからもう諦めてはどうか、と考えている人たちに、ひとこと言いたい。まだ旧体育館は残っており、われわれはまだまだパワーがある。これまでの経緯にはわれわれにも反省すべき点があるかもしれないが、だからといってそのツケを旧体育館に払ってもらおうというのは、筋違いである。熟慮すればするほど、理事会にこのまま旧体育館解体を許してしまうのは、大学人として知的怠慢であると考えざるをえない。われわれは、旧体育館解体とオープンスペース化についての説明責任をあくまで理事会に求めるし、合意形成の努力なしに解体工事が強行されることに、あくまで異議を申し立てる。そう簡単に諦めてはならないことが、この世にはあるのだ。そればかりではない。ありそうにないことが、それでもこの世には起こることがあると、そうわれわれは信じてよいのである。

2009年3月23日

旧体育館シンポジウム実行委員長 森一郎



発言者の申し出により、一部削除したところがあります。

連絡先：

〒167-8585 杉並区善福寺 2-6-1
東京女子大学哲学研究室気付
旧体育館シンポジウム実行委員会